

創刊苦心

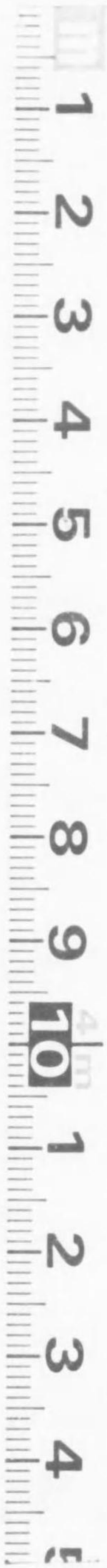
特279-431



\*76#11039\*

431

石山賢吉著



始



石山賢吉著

創刊  
苦心



76W11039



上野乙部

議 着

## 自 序

ダイヤモンドが、さうにか物になつたのは、全く時勢のお蔭だ。是れは、私が謙遜して云ふのではない。眞實、私はそう信じて居るもので、歐洲戦争がなかつたならば、ダイヤモンドは疾うの昔に煙になつて居るのである。

然し、時勢に助けられた雑誌でも、其經營に苦心がない事はない。順風で走る帆船でも、舵取りに苦心があると同じ事だ。取り分け、私は、記者が本職で、經營は全然素人である處から、人一倍骨が折れた。本書は、私がダイヤモンド誌上に、創刊の苦心を書いたものを、纏めて小冊子にしたものである。無論、手前味噌に過ぎない。参考など云ふ代物では決してないが、雑誌社の樂屋を覗いて見る氣なら、或程度まで其目的が達せられよう。

本書は、此目的で讀んで頂きたい。そして、一度雑誌に書いたものを、二度冊子でお目見得させる

自序

著者の無遠慮を大目に見て頂きたい。

昭和五年五月

—(二)—

石山生

目次

創刊苦心……………(一)

草津雑信……………(一九三)

創刊苦心

(昭和三年一月より  
四年六月迄に執筆)

## 創刊前

### (1)

弊誌も本年（昭和三年）五月になると、満十五年になる。過去を顧ると、色々の感想がある。私事に渡る點もあるので、少しお聞き苦しいかも知れないが、私をして、此機會に、過去十五年の思出話をさせて頂きたい。

私がダイヤモンドを創刊したのは、偶然の機會からであつた。雑誌を發刊したい宿望があつて、ダイヤモンドを發行したのではない。毎夕新聞を抛り出され、勤め口を搜したが見當らず、仕方がないから、多少手心のある雑誌發行をやつたまで、ある。それがさうにか物になつたのだから、人間さ云ふものは、何が仕合になるか、わからぬものだ。

一體、私は妙な運命に支配されて來た男だ。私は生れた年に父をうしなつた。父がなくなると同時に、私の家は潰れた。そこで、母親の實家へ引き取られて育てられた。育ての親は私の母の兄、即ち私の伯父である。

伯父は、私が十歳位になると、坊主にすると言ひ出した。私は子供心にも坊主などは嫌ひであつたから、そんなものになるのは厭たさ云つた。

すると、今度は足袋屋の職人にするさ云ふ。私は小さい時から、いたづらの發達したヤンチャ坊主ではあつたが、一面女のような所もあつた。私は編物が出来る。是は十一二歳の時に覺れた。其時の練習で今でもやるが、中々旨いものである。嘘だと思つたら、やらして御覽なさい。ピツクリされるような精巧品を編んでお目に掛けるから……。伯父は此私の手細工に目をつけて、足袋職人にしようさ考へたらしい。

私は、それも厭たつたが、伯父には、何とも云はなかつた。差迫つた話でなかつたからだ。其頃、

小學校は八年。其八年の課程を卒へて、それから後ちに足袋屋へ弟子入りするのだから、ズット先きの事になる。そう云ふ遠い事柄に對して、子供の私が、伯父に彼れ是れ云へないので、黙つてゐたのである。

さかくするうちに、私の母が後妻に行く事になつた。其家は子がないから、私を養子にさうかよふことになつた。そこで、私は、母が縁付いて暫くすると、其家へやられた。これで足袋職人は自然消滅になつた。やられた家は、新潟市の人力車製造業者であつた。(私の生れた町は新潟縣の曾根町、伯父の家は其隣の白根町である)私は其家で人力車製造の手傳ひをさせられた。

私は其手傳が厭ではなかつたが、車夫などが澤山出入して、其家の空氣が厭たつたので、半歳ばかりで伯父の家へ逃げ歸つた。

丁度、其頃、私の町(白根町)へ電信が設けられる事となつた。これで又私に對する伯父の方針が變つた。伯父は局長から、私を電信掛にしないかよ云ふ勧誘を受けた。其局長よ云ふのは、私よ一緒

にダイヤモンドを創刊し、それ以來、私よ仕事を共にして居る相澤君のお父さんで、其町では伯父が最も尊敬して居る人であつた。其人の勧誘だから、伯父は一も二もなく承諾した。そして、私を新潟に送り、六ヶ月の講習をさせた。此時、阿部君(ダイヤモンド社同人)よ講習が一緒であつた。

其頃の阿部君は小さかつた。私も小さかつたが、私よりも亦一ト廻り小さかつた。歳が一つ少なかつたからであらう。筒袖の着物を着て、小倉の袴をはいて、駒鼠のようにちよろ／＼してゐた形が、今でも眼に残つてゐる。

阿部君は六ヶ月の講習を五ヶ月で卒業した。出來がよかつたから。私は、そう云ふ機敏な藝當は出來なくて、規定通り六ヶ月掛つて漸く卒業した。阿部君は六日町の郵便局へやられ、私は私の町へ歸つた。それから二十年経つて、東京でめぐり遭つた。早熟の阿部君は、其時既に額の面積を擴張してゐた。私は往時を顧みて、時の神の惡戯に驚いた。ちよろ／＼袴の少年が洋服のオヤジに變つてゐるよは驚くぢやないか。

阿部君は田舎の郵便局から本省へ拔擢され、其地位は大に進んだが、役所勤めがイヤになつたので、辭職して私の仕事を助けて呉れる事になつた。但し、それは後ちの事で、講習を終つてからの私は、前後五年間電信掛を務めた。私の町に三年、隣りの町の加茂と云ふ所に二年。それから志を立て上京した。それは私が二十二歳の時であつた。

最初、判検事か辯護士になる希望で、日本大學の専門部へ入學した。在學僅か六ヶ月にして某先輩の忠告に従ひ、慶應義塾の商業學校に轉じた。卒業後は會社か銀行へ奉公する積りであつたが、校友會雜誌に書いたのが動機で、雜誌記者となり、それから新聞記者となり、一轉して、ダイヤモンドを創刊したのだから、願はば、私は、妙な運命に支配されて來た男ではないか。

簡單なる以上の物語でも、直ぐお氣付になる如く、私は性來ツムジ曲りに出來て居る。さうも服従心が足りない。子供の癖に、伯父に反抗して、其言ふ事を少しもきかなかつた。其惡癖がついて廻つて、毎夕新聞社ではその爲めにやられたのである。

私は商業學校を卒業してから、五年はかり實業之世界社で働き、サンデーに轉じ、日本新聞に移りそれから所望されて毎夕新聞に入つた。入つてから一ヶ月はかり経つと、編輯局長と云ふ觸れ込みで小野瀬不二人と云ふ人が我々の上へ天降つて來た。私は此人が何さなく氣に喰はなかつた。そこで事に反抗した。小野瀬氏が私に辛く當つた譯でも何でもないので、今から考へると、甚だ濟ましい事をした譯だが、ツムジ曲りの性癖が小野瀬氏の服従を承知しなかつたので、その爲め毎夕新聞を抛り出されたのであつた。

然し、私は抛り出されても少しも驚かなかつた。勤め口などは直ぐあるものと自惚れて居た。處が其自惚れた勤め口が中々ない。そこで、手ぶらで遊んで居るのも氣が利かないから、いつそ此機會に鼻の根本的治療をしようとして、日本橋蠣殻町の木村と云ふ耳鼻咽喉の専門病院へ入院した。

(II)



病氣でよいものはないが、取り分け、我々の如き頭を使ふ職業には、鼻の病氣は禁物だ。私は、日本新聞に居た時、一時原稿が書けなくなった。新聞に出す短い原稿なら書けるが、他所から頼まれて内職に書く長い原稿は書けなくなった。

私は其時悲觀した。纏つた原稿が書けないようでは前途がない。いつそ、今のうちに、職業を變へようかと思つた。

處が、醫者から診て貰ふと、それは鼻の悪い爲めである事がわかつた。醫者が鼻へ薬をつけて呉れると、忽ち頭がハッキリして、別人のようになる。私は、其薬の靈効に驚いた。だが、惜しい事にはそれは一時的であつた。五六時間経つと、又元の通りになつて、頭がポツとして仕舞ふ。

病名は、蓄膿症、手術をしなければならぬとある。

手術は少しも恐れぬが、生憎、時期が悪かつた。

私は、それより二三ヶ月前に、痔の手術を受けた。これでスツカリ貯へが無くなつて仕舞つた。續

いて鼻の手術と云ふ譯に行かない。是が先づ第一の故障であつた。

次ぎに時間の都合もつき憎くかつた。其時は毎夕新聞へ入社匆々であつたから、二週間も三週間も休ませて呉れとは言へない。そこで不本意ながら姑息な療法をして居た。然し、いつまでもそうしては居られない。機會があつたら……と思つて居た折柄、毎夕新聞を抛り出されたので、思ひ切つて鼻の病院へ入院したのである。其後の原稿稼ぎで貯へが少々出来て居た。短期の入院ならさうにか間に合ふ位に……。

手術は想つたより辛らかつた。痔の手術に比較すれば、何程の事もあるまいと思つたのは誤りであつた。ノミで口中の骨を碎かれる時、頭に響いて、氣持の悪るいたら、ない。私は其時始めて、肉を切られる痛さなどは、骨を碎かれる不愉快さに較べれば、何でもない事を知つた。幸ひ、手術後の経過は良好で、豫定通り十日ばかりで退院する事が出来た。

退院匆々再び勤め口を捜したが、無い。貯へも遣ひ果して、安閑として居られないから、大に馬力

を掛けて探したが、無い。

仕方がないから、雑誌でもやらうか云ふ氣になつた。

私は最初『投資』と云ふ雑誌に、使つて呉れぬかと申込んだ。此雑誌は獨立した雑誌ではない。谷と云ふ株式仲買店が廣告用に發行して居る小雑誌であつた。然し、内容は中々氣が利いて居た。この若主人は洋行歸りの新智識であつた處から、廣告雑誌に不似合な内容のある雑誌であつた。私は此雑誌に腕を揮つて見たかつた。

谷商店は立派な雑誌を出して居るだけに、調査部には、材料が整つて居た。私は時々材料を見せて貰ひに行つた。其關係から『投資』にも寄稿した。『決算報告の見方』などは、最初此雑誌に書いたのである。屢々出入するうちに若主人と懇意になり、編輯者とは友達になつた。そこで、毎夕新聞を抛り出されるや、私は第一に『投資』記者を申込んだのであるが、經費の都合で斷はられた。

次に、『東京タイムス』の記者を申込んだ。是れは、友人がやつて居る週刊雑誌であつた。其友人と

云ふのは、『實業之世界』で一緒に働いて居た連中で、松下傳吉君が主幹、北山米吉君が編輯長、若宮卯之助君が主筆であつた。然し、是等の人々は表面に働いて居るもので、實權は其背後に在る池田藤四郎氏に在つた。私は池田氏に其一味へ加へて呉れるよう申込んだのであつた。

すると、池田氏は私の性癖を知つて居るから、體よく斷つて

『それよりも、君は君として別に雑誌をやつてはどうか。』

と勧めた。そして、雑誌の名まで教へて呉れた。

『ダイヤモンドと云ふ名が面白いぢやないか。小さくても光るミ云ふ意味で……』

池田氏は、私が『實業之世界』の前身である『三田商業界』を暫く主宰して居た事を知つて居る。それから又『實業之世界』でも、野依秀一君の相棒になつて、相當の部所を受持つて居た事を知つて居る。それで雑誌はやれると思つて、勧めたものらしいが、私は、其經驗で、雑誌を發行して行く事は、容易でない事を知つて居るから、池田氏の勧めに従ふ氣はなかつた。然し、其後、勤め口を捜し

でもないので、池田氏の勧めが段々頭を持ち上げて来た。小さくても光るダイヤモンドと云ふ名は面白い、それに引き付けられて、自分も一番、小型の新雑誌を刊行して見ようかと云ふ氣になつた。

そこで、先輩の米倉嘉兵衛氏に相談した。それは新橋停車場へ大阪の人を送つて行つた歸り途であつた。米倉氏は思慮綿密の人だから、直ぐには賛成しない。銀座通りを歩きながら話し、到頭日本橋まで歩き続けた。そして、其處で別れねばならぬ事となつた。其時漸く米倉氏は

『それなら、まあ、やるよし給へ。』

と、賛成して呉れた。

私は之に大に力を得て、愈雜誌刊行と腹を極め、同志を集めに掛つた。そして其一人として佐藤武雄君を得た。

佐藤君は毎夕新聞で私の下に働いて居た人で、同君に相談したら、即座に應諾して呉れた。然し、一人の同志では足りないので、更に之を相澤周介君に計つた。

相澤君は其頃『法律評論』と云ふ雑誌の編輯をして居た。然し、其希望は判検事及辯護士の資格を得る事にあつた。そこで

『受験の希望は捨てないが、それまで仕事を一緒にしてもよい。』

と云ふて呉れた。

是れで又一人の同志が殖いた。殊に相澤君は、頭がよくて文章が旨く、雑誌記者には経験もあるのだから、甚だ頼母しかつた。

これで、愈々雑誌發行をやる事となつた。是が大正二年の三月の末である。

(三)

雑誌發行と決心したからには、事務所を設けなければならぬ。

其事務所は、今ならばビルディングの一室と云ふ所だが、當時そんな氣の利いたものはなかつた。又

あつても借りることは出来なかつた。私の懐にはたつた金七圓しかなかつたのだから、借間をするより外ない。其借間も立派なものでは前金が足りない。精々、貧弱なものを捜さねはならなかつた。

佐藤君と二人で貸間を捜しに出掛けた。其頃は、兜町麴殻町が東京の中心地點になつて居たのだから、出来る事なら、我々は、其附近に事務所を設けたかつたが、間代が高いのに恐れをなして、あの方面はテナデ捜さなかつた。茅場町から築地への電車道を南へ歩き、日本橋を通り抜けて京橋へ移つた。そして、繁華な銀座通へは近寄らずに人通りの少ない八丁堀の方面へ曲つた。

そうしたら、其處に一軒貸間のあるのを發見した。氣に喰はないが間代が安いから借りた。

間代は三圓。そんな安い所でも五六圓は取られるのだから、我々が飛び付いたのも無理はない。

其家は、龍宮と稱する貸席であつた。名は綺麗だが、家は穢い。一階と二階は寄席のような構造にしてあり、三階を細かく割つて貸す事にしてあつた。我々は三階の一室を借りたのである。

三方塞りの一方明き、其一方も高窓になつて居るのだから、光線が不十分で、風通しの悪い事、一

ト通りでない。おまけに、他の部屋はガラ明きで、寄席式の一階二階も借り手がないから、晝でもションとして居る。さう見ても化物屋敷と云ふより外なかつた。

それでも、我々は、僅かな金で、一室を借り得たことを悦んだ。それに有り難い事には、此家に電話が取附けてある。是れは何よりも重寶だ。電話は人を訪ねる事が商賣の雑誌發行者には、無くてならぬ代物だが、三圓か四圓の借間には、そんな贅澤な望みは出来ないので、諦めて居た處、思ひ掛けなく其設備があるので、大に有難く感じたのである。

間を借りたので、次ぎには器具の調達に取り掛つた。

第一に必要なのは机であるが、それは、一脚しか買はなかつた。三人もやいで使ふ事にしたのである。日本間だから椅子は要らない。椅子の代りに座蒲團が必要なのだが、さう云ふものは贅澤物として排斥した。火鉢も買はなかつた。机の外に本箱を只一つ買つた。是れは私の手元に在つた考課状と参考書を入れる爲めであつた。兩方共無論古物である。くすぶつた古道具屋から買つたのである。然

も、机は正式なものではなかつた。食事に用ゐるチャブ臺の古物である。如何に物價の安い頃かは云へ、二つで三圓足らずの代物なから、碌なものでない事は解り切つた話である。それでも物資尊重の念慮の強い我々の事だから、此チャブ臺を永く使つた。赤坂へ移轉しても、蠣殻町へ移轉しても、彼を其本來の使命に歸らせて勝手に永く使つた。今の内幸町へ移轉してからは、食堂の組織が變つたので、いづれへか仕舞ひ込んだが、愛すべき彼は、安く身賣りをして來たにも拘らず、我々に五六年間忠勤をぬき出したのである。

室内器具は出來た。次ぎに必要なのは看板である。貸席龍宮方では氣焰が揚らない。「方」なしに手紙が來るようになければならぬ。それには、何處の隅つこにもせよ、看板をかけて置かねばならぬ。看板は古物と云ふ譯に行かない。縁起を擔ぐ譯ではないが、古物の適當なのが容易に見當らないのである。と云つても、一圓少許の懐では滅多な新物は買へないので、佐藤君と協議を凝らした結果、附近の下駄屋から薄板の切れ端を譲つて貰つて、それを看板にした。

字は私が書いた。無論、自信があつてゝはない。書き賃を拂ひたくない爲めの經濟主義からである。字のまづいのは兎に角さしても、据はりが悪いのに困つた。頭デツカチの、尻つぼまり、こ來て居るので、體裁の悪い事夥しい。それでも仕方がないから、我慢して其看板をかけた。

これで我々の事務所は出來た。なごと云ふのは烏漣の沙汰。ハタから見れば、子供のまゝ事にも及ばぬものだが、我々はそれで兎に角落ち着いた。そして、此事を第一に産婆役の米倉嘉兵衛氏に知らせた。米倉氏は、二三日経つと、こんな様子かと思ひ來た。そして、先づ第一に龍宮がガラソとして居て、人けの無いのに驚いた。無氣味な梯子段を登つて、三階の一室に辿り着き、戸を明けたが誰も居ない。机が一脚に木箱が一つ、室内は新聞紙の讀み殻がいはいに散らばつて居て、おそはの殘骸が抛り出されてあつたので辟易して歸つたと云ふ事である。以て當時の光景が窺はれよう。それでも此所がダイヤモンドの發祥地となつたのである。

事務所が出來ると、私は取り急ぎ發刊の趣意書を書いた。

文句はさう書いたか忘れた。大體の趣向は考案の大家たる池田藤四郎氏から教へて貰つたようた。詰り付け焼刃だから、忘れたのだが、ダイヤモンドと命名した理由を書いた事だけは憶ひて居る。

趣意書の印刷は豫ねて知合の博文館印刷所に頼んだから、即金でなくて済んだが、それを配布する郵便代に困つた。是れは米倉氏から寄附して貰つた。それはかりでなく、それからの運動費も米倉氏から寄附して貰つた。

然し、それは決して大金ではなかつた。三十圓ばかりであつたようである。日本橋の大問屋たる米倉氏の事だから、呉れと云つたら、モット呉れたであらうが、それで足りたから、それだけしか貰はなかつたのだ。私の懐にあつたのこ合はせて四十圓足らずの金で、兎に角雑誌發行の準備が出来たのだ。實にアンチョコなものさ云はざるを得ない。これだから、小雑誌の發行者が殖へるのである。世の中に小雑誌發行ほご準備費の掛らぬものはない。

## 發 刊

### (一)

發刊趣意書を配布すれば、雑誌刊行の宣言が出来た譯だから、愈々佐藤君と二人で外部の運動に取り掛つた。

其運動は、一は種取り、二は廣告取りであつたが、私は廣告取は生來大嫌ひだから、餘りやらなかつた。大抵佐藤君からやつて貰つた。只一つ白木屋へだけは、私が談判に行つて成功した事を今に記憶して居る。

其頃、白木屋に高野復一と云ふ人が居た。我々が白木屋を訪問すると、必ず此人が會ふ。新聞雑誌掛であつたのである。あゝ云ふ店では、新聞雑誌掛は重い役目と見えて、主事とか參事とか云ふ肩書

を附けて、重役の次ぎ位に据はつて居た人が我々に應接するのであつた。

佐藤君が高野君を訪ねて、廣告のムシンをするご、キツバリ断られた。曰く、白木屋は初號には廣告を出さぬご云ふのである。

佐藤君が歸つて来て、此事を龍宮の三階で私に報告した。私は普通ならば、

『それは止むを得ん。』

と引き下がる處だが、其先きに佐藤君が三越から廣告を買つて来て居るから、鼻息が荒い。三越も初號は絶対に廣告を出さぬご云ふ掟でありながら、我々たご云ふので、特別に呉れた。そうすれば、白木屋ごても呉れてもよい譯だ。ご云ふ手前勝手の理屈を附けて、私が再談判に出掛けた。

此時、私は辯説大に努めた。

我々の如き微力な雑誌に對する廣告は、廣告でなくて寄附である。あなた方が公刊物の立場を諒解して、寄附的の廣告をされる以上は、二號よりも初號にする方が、有意義のやり方ではないか、ご云

ふような事を説き立てたのである。

高野君は新聞雑誌掛をして居るほどの苦勞人であるから、直ぐ思ひ直して承知して呉れた。そして初號だけではなく、一年間位の長期契約をして呉れた。私は、只管、其厚意を謝し、且つ寄附的廣告の要求なごは、理屈で立つ我々の本旨でないから、ごうにか行き立つようになれば、早速此方から辭退する旨を言ひ置いて辭去した。

私は、それから今日まで十五年間雑誌商賣をして居るが、積極的の廣告取りをしたのは、アトごも先きごも、是が只一回である。廣告取も雑誌營業の重大要務である事はよく心得て居るが、性格がそれに向かないのだから、是非もない。

廣告は佐藤君に任せて置いて、私は、主として原稿の製作に従事した。そして、その爲めに、會社を訪問したり、名士を訪問したりした。

或朝、下澁谷の邸宅に福澤桃介氏を訪ふご、氏は笑ひながら、私を迎へて

『雑誌をやるつて……。詰らん、やめ給へ。悪口を書かなければ賣れんし、書けば憎まれる。君のような、おとなしい人のやる事ぢやない。暫く辛抱して遊んで居給へ。僕が今生命保険会社の許可を申請して居る。それが許可になると、君にやらせるから……。その方が適任者ぢやないか。』

斯う云はれて、私の心は少らず動搖した。雑誌經營の六つかしい事はよく知つて居る。自分も之をやる決心するまでには、大に迷つた位である。それよりも生命保険會社の方が私に適して居るに相違ない。私は福澤氏が不肖な私を認めて、斯ふ云ふ親切な事を云つて呉れたのを、心から感謝した。然し、惜しい事には、時期が少し遅かつた。私は雑誌發行を決意して、小人数にもせよ、同志を糾合して居る。そして、既に發刊の趣意書を配布して居る。斯うして置いて、よい口が見附つたからさて、決意を醸しては、常操がない事になつて、甚だ申譯がないから、突嗟の間に肚を極めて、福澤氏の厚意を謝し、

『折角決心した事ですから、兎に角やつて見ます。』

と、キツバリ云つて退けた。

福澤氏は、あつさりした人だから、強いてとも云はなかつた。のみならず、私が氏の忠告をきかなかつたからさて、少しも厭な顔をせず、其次ぎに訪問した時は、前の話などケロリと忘れたような顔をして大に盡力して呉れた。

私はそれから大に福澤氏の世話になつた。氏の世話振りには公私の別を明かにしたもので、我々に取つては理想的のものであつた。弊社の發展には氏に負ふ所が少くない。さかくするうちに、相澤君も法律評論の方を手を切つて、原稿製作に參加した。それで、さうにか、初號の原稿は出來上つた。之を纏めて印刷所へ送る段になつて、茲に一つの故障が起つた。それは貸席龍宮が夜業を許さぬ事であつた。其頃、龍宮には電燈の設備がなかつた。イヤ全然なかつたのではない。一階二階にはあつたが三階になかつたのである。

そこで、我々はランプの用意をした。下宿屋時代の古物を品川の拙宅から捜し出して、龍宮へ持つ



て来たのである。

一夜之を點じ、原稿を書いて居ると、抗議を申し込まれた。ランプは火事が危険だから、よして呉れよ云ふのである。

夜業を断られるとは珍無類であるが、考へて見れば、我々の光景も珍無類であつた。懇意の米倉氏すら辟易して歸つたのだから、家主から見れば、部屋一はいの紙屑が氣になつたに相違ない。其處にランプをつけて原稿を書かれては、間違が起り易いさ考へたのは當然である。そこで、佐藤君が禿げ頭に湯氣を立て、交渉しても、家主は頑として應じない。我々は、日が暮れると、其部屋を辭去せざるを得なかつた。

原稿を雑誌に纏める段になると、行數を計算したり、ウメクサを書いたりしなければならぬ。これで却々手數が掛るものである。晝間の八時間作業では終らない。どうしても、夜業をせねばならぬ。龍宮では其夜業を許さぬので閉口した。

仕方がないから品川の拙宅で編輯をやつた。狭い部屋で、三人寄つて、暗い電燈の下に、徹夜で編輯をしたのである。

## (二)

三人徹夜の効あつて、初號の編輯は一夜で全部出来たから、それを一括して博文館印刷所へ廻はした。

博文館印刷所は今の共同印刷會社である。博文館が自家用に建てた印刷所であるが、段々發展して其頃でも規模は日本一であつた。ダイヤモンドの初號は其處で印刷されたのだから、印刷だけは豪儀なものたつた。但し印刷は一回だけ云ふ約束であつた。二號は刷つて呉れないのである。

さうしてかこ云へは、部數が少いから。我々は、初號は一千部刷る事にした。二號からはそれより多く刷る積りだが、それでも高が知れて居る。二千か三千位なものだ。左様な少い部數は、博文館

印刷所では相手にしない。五千部以下は絶対に駄目だ云ふのである。

私は、營業部長の萩原勝次郎君を實業之世界社時代から知つて居た。其緣故で、特別に頼んだ處、初號だけ承諾して呉れたのである。

初號だけにもせよ、我々は刷つて貰へる事を悦んだ。初號を發行すれば、二號は又どうにかならう云ふのが、當時に於ける我々の氣持であつた。今から考へれば、薄弱極まる考へたが、七圓の金を資本にして、雜誌發行を目論むほどの無法者だから、そんな氣持は當然である。

原稿を博文館印刷所へ廻はして三人はホツとした。そして暫くは閑散な身となつた。それを利用して相澤君は歸國した。金の工面に歸つたのである。

其金は、政府へ納める保證金が主であつた。正式にやれば、政府へ保證金を納めて、それから後ちに雜誌を發行すべきものであるが、私は三田商業界や實業之世界の經驗で、此點は少々横着を極め得る事を知つて居た。保證金の納入が遅れると、警視廳へ呼び出して叱られるが、其時恐入つて保證金

を納めれば、それで済む事を知つて居たので、先づ初號を發行し、それから後ちに、保證金を納めることにしたのである。

國へ歸つた相澤君は、上々の首尾であつた。阿母さんを説き付けて、臍くりを巻き上げ、千何百圓云ふ大金を懐にして、引返へして來た。

我々はそれで早速公債を買つた。額面千圓の四分利公債を時價八百何十圓かに買つて、日本銀行へ供託し、供託證を受取つて、それを政府へ納入した。これで其筋への手續を終つた。

そうしても未だ金が残つて居る。夜業の出来ない龍宮では、到底雜誌の編輯が出来ないので、何處か一軒借りる事にした。一軒云つても無論小さな家である。

京橋方面は高いから、芝方面を搜した。そして、新櫻田町の路次に一恰好の貸家を見出した。

差配を搜ねて借りる約束をした歸り途に澤村幹三君に遭つた。彼と私は、實業之世界時代の知り合である。其後を語り合つて見ると、彼も今は遊んで居る。私が雜誌をやる事を話すと、僕も一緒に

やらうと云ふ。彼は廣告取に妙を得た男だから、我々への配合には至極適當して居る。

『よからう。』

と云ふ事になつて、話は直ぐに纏つた。向ふも向ふであれば、こつちもこつちである。一生の大事を立話で極めるのだから、畢純である。何事も當時は、滑稽づくめ、お茶番づくめであつた。

話が極つたから、引返して澤村君に新借家を見せた。すると、彼は

『こんな薄暗い家は駄目だ。』

と云ふ。

『無論我々こそ好む家ではないが、家賃と相談だからナ。』

と云へば、彼は、

『これだけの家賃を出せば、表通りに立派なものを借りられる。』

と云つて、きかない。

實を云へば、我々は家賃以外、雑誌發行所と云ふ事を恐れて居た。雑誌發行所は信用がないから、大概の家主は貸さない。彼に其事を話すと、彼は平氣である。

『其處はこつちの腕次第だ。』

と云つて、其日はそれで別れた。

翌日になると、澤村君はモット上等な家を探しに出掛けた。私や相澤君や佐藤君は、三人共、揃つて氣が小さいから、そう云ふ勇氣はない。所詮、新櫻田町の家にするより外ない話めて、ソロ／＼掃除に取り掛つた。

そうして居ると、澤村君が息を切つて駆け付けて來た。

『いゝ家が見つかった。』

と云ふのである。

場所は赤坂で、少し遠いが、大通りで、門構いで、素敵に立派な家だと云ふ。

さらには、三人掃除をやめて、澤村君について其家を見に行つた。成程、澤村君の云ふ通りである大通りで、山王の森を見晴らし、新櫻田町の蔭靜さは比較にならない立派な家である。

三人共、スツカリそれが氣に入つて了つた。それだけ、雑誌屋に貸すか、心配であつた。

『そんな事は屁でもない。』

と云つて、澤村君は我々を赤坂の通りに待たせて置いて、家主へ掛ケ合に行つた。そして、間もなく歸つて来て、

『立派に借りて来た。』

と、報告するのであつた。

『雑誌屋と知つて、アトで斷はられるような事はないか。』

と、念を押せば、

『大きな看板を上げる事まで承知させて来た。』

と、頗る得意である。

段々交渉の内容を訊いて見ると、彼は我々を金持ちの息子だと觸れ込んだ。金持ちの息子が寄り集つて道樂で雑誌をやるんだと、吹いた。そうしたら、家主は恐縮して、廣告用の大看板まで上げる事を承諾したと云ふのである。

辯舌一つを資本にして居るだけに、流石に彼は交渉がうまかつた。我々は、早速其家を借りる事にして、新櫻田町の家を斷つた。手金を少々損したが、大福々の時だから、そんな事は平氣であつた。

## 最初の難關

### (一)

澤村君の外交術で、赤坂田町の大通に門構の一戸を借り、それへ椅子テーブルを並べ、外に廣告用

の看板を掲げ、電話まで引いた。無論、其電話は借り物であつた。それで一ト通り設備が整ひ雑誌社らしくなつた。

五月五日には、雑誌の印刷が出来た。我々は一日の發行にしたかつたのだが、一日は他の雑誌がたてこむから駄目だ、印刷所から断はられ、仕方なく五日にしたのである。印刷は出来ても千部ばかりの雑誌は書店へ出して賣る事が出来ないから、私は之を知己友人に寄贈した。残りの物は見本の意味で雑誌を買ひそうな處へ只やつた。

世間からソツト雑誌の批評を訊いて見ると、満更でもない。

『小型で、引締つて、氣が利いて居る。』  
『褒めて呉れる人が多い。無論お世辭もあるが、それを割引しても、何物か、残る。我々はそれで大に氣をよくし、二號の發行に取り掛つた。二號は澤村君が廣告を取り、我々三人は原稿書きを専らとした。初號より榮に出来た。』

印刷所も旨い所が見附かつた。教文館の附屬印刷所から刷つて貰へることになつたのであつた。

二號が出来ると書店へ廻はした。二千五百部刷り、五百部を手許に保留し、二千部を書店へ廻はしたのである。

一ヶ月経つと、其大部分が返されて來た。二ヶ月目にも幾らか返つて來た。差引して三四百部しか賣れなかつた。八割強の返品があつたのである。なさけない次第であるが、他の振合を訊いて見ると未だよい方である云ふ。

或雑誌は、初號は三部しか賣れなかつた。又或雑誌は二三十部に過ぎなかつた云ふて居る。その云ふのに比較すれば、我々ののは、十倍百倍に當る。廣告も何もしないのだから、賣れないのが當然で三百なり、四百なり、賣れたのは未だよい方だ、この道の先輩からきかされて、成程さ合點した。

續いて三號も出し、四號も出し、五號も出し、それから六七ヶ月は經營に苦しみなながらも、比較的無事たつた。此間の事故云へは、澤村幹三君が退社して、吉田朝次郎君が代つた位なものであつた。

そのうちに大正二年が暮れて、三年となった。二月號の原稿を書かう／＼と思ひながら、正月氣分に妨げられて書けないで居ると、私に一大災難が來た。その爲め、ダイヤモンドが潰れそうになった。事の起りは、私の子供の病死に始まる。

私は、雑誌の發刊當時、女房や子供は邪魔だから、里へ預けた。然し、何時までも預け放しと云ふ譯に行かぬから、三四ヶ月で引取つたが、それでも宅へは滅多に歸らず、大概赤坂の事務所に泊つて居た。

すると、忘れもしない一月十八日に、品川の宅から電話が掛つて來た。子供が悪いから、今夜は歸つて呉れと云ふのである。それで、私は其日の夕方宅へ歸つた。二女のキヨ子が大熱である。

醫者は風邪だと云つたそうだが、そう云ふ單純な病氣でない事は素人眼にも分る。

吐いて、下して、大熱で、便の色が非常に悪い上、時々失神すると云ふ、只ならぬ容體である。私は醫者を呼びにやつた。間もなく醫者は來て呉れた。

果して、今度は風邪と云はない。

『腦膜炎らしい。』

と云ふ。

そう聽いて我々夫婦はギョツとした。當時、我々は、醫學的智識が甚た乏しかつたけれども、腦膜炎の恐ろしい事位は知つて居た。腦膜炎に罹ると大概の子供は死ぬ。幸ひ癒つても、白痴になるから死んだ以上の不仕合である。こりや大變と思つたが、一縷の望みは、

『腦膜炎らしい』と云つて、『腦膜炎』と云ひ切らぬ點にある。

私は、心配で堪らないから、醫者に念を押して訊いて見たが、矢張り明答しない。

私は、醫者が明答しないのは、我々夫婦を驚かさない爲めかとも考へた。然し、様子を見ると、そんな含蓄のある醫者ではない。彼は高輪病院の醫員であつた。學校を出たばかりの若造で、全く診斷が付かぬものらしい。

茲に於て、我々夫婦は、大なる不安に襲はれた。

病氣が分らなければ、手當も不十分に相違ない。そう云ふ醫者に、高熱で苦んで居る我が子の運命を託して置くのは、甚だ心細い。他の適當な醫者から診て貰ひたいと云ふ念慮が、大に起つたが、そうするには懐が淋しい。私のガマ口には一二圓しかない。ワイフの方はそれ以下である。一家を擧げて三圓以下の手許では、名醫を迎へに行く勇氣も出なければ、病院へ擔ぎ込む智慧も出ない。

仕方がないから、ワイフは只病兒を抱き締めて居た。私はそれを見て徒に氣を揉んで居た。

病は刻々に募る、容體は益々悪くなる。夫婦共、只見て居るに忍びないから、下女を督して、代診の先生を迎へにやつた。すると、其時は夜中の二時であつたにも拘らず、わけもなく來て呉れた。醫術はヘツポコでも、足の早いのは、我意を得て居た。見立は、相變らず曖昧であつた。何やら知れぬ注射を一本して呉れて歸つた。

然し、そんなことは寸効もなかつた。病勢は益々募り、遂に呼吸さへ覺束なくなつたので、又代診

を迎へにやつた。すると、又、即刻來て呉れた。其時、愛兒は半分死んで居た。斯うなつては、代診先生でもよく分るものと見て、一寸聽診器を當てたゞけで『最早駄目だ』と宣告した。

彼は念の爲め、注射を一本したが、何等の反應もなかつた。朝から苦しみ通した我子は、安けき眠に歸り、僅か一年一ヶ月生きたゞけで、此世を去つた。代診先生は

『どうも残念でした。』

と云つて、餘り残念でもなさそうな顔をして歸つたが、我々夫婦は餘りに呆氣ない我が子の死に魂を奪はれ、只茫然として暫く言葉も出なかつた。

(二)

餘りに呆氣ない我が子の死に、茫然自失した私は、暫くして我に返つた。其時は夜が明けかけて居た。二女キヨ子は拂曉四時に死んだのである。病み出してから二十時間目であつた。病氣は劇しかつ

たけれど、時間が短かつたので、瘦もせず、丸々肥つた儘で死んだ。女房は、死んでも我が子を懐から放なそうとはせず、其儘ジツと抱いて居たが、呼吸が絶えて、何時まで経つても生き返らぬので、聽て諦めをつけ、靜に寢床へ横へて、合掌させ、それから附近をかたづけ始めた。

私は、何をすべきか考へた。

そうしたら、直ぐ胸に浮んだのは、金だ、金の工面だ。三圓足らずの懐では、さうする事も出来ない。坊さんを頼むにも、火葬場へ送るにも、金が要る。其金の工面をせねばならぬ事を、私は直様胸に浮んだのである。

社に金があれば、勿論、何の面倒もない。處が、社に金のない事は、訊かなくても分つて居る。其頃、佐藤君が會計であつた。私は、佐藤君に常々云ふのであつた。不時に、如何なる出来事があるかも知れない。其時、先き立つものは金だ。不時の用意として十圓の金を準備して置いて貰ひたい。後は後として、それだけの金があれば、應急の處置が出来る。我々が生きて行く爲には、それだけの準

備が是非必要だ。と云つても、手許に現金を持つて居る事は到底出来まいから、振替貯金をそれだけ保留して置いて呉れ、と云ふのだけれども、佐藤君は決して之を守らない。振替貯金を儘の如くに扱ひ、五圓溜ると、必らず引出す。三圓でも容赦はしない。當時、社の財政は、それほど窮迫して居たのであつた。だから、私は、社の方なんて、テンで問題にしなかつた。

何處へ金を借りに行つたものか。……知合は澤山あるが、減多な所へは行きたくない。瘦せても、枯れても、一つの雑誌社を經營して居る者が、子供が死んでも、お葬式の費用がないなど、餘りに見つともない。男子の面目として、矢鱈の所からは借りられない。何も彼も打ち明け得る所を考へた。そうしたら、桑原先生の外ない事となつた。

桑原先生と云ふのは、現在、慶應義塾商業學校の校長をして居る桑原虎治氏のことだ。私は三田商業界時代に永らく先生の世話になつた。二年間も先生の家族同様にして置いて貰つた。私は先生に養はれたり、引き立てられたりしたものだ。先生は、私の長所も、短所も、知つて居る。斯う云ふ場合



に、頼むのは先生の外ないさ、肚を極めて家を出た。

時は、冬の真只中、おまけに朝と来て居るから、都を吹く風でも、身にしみるほど寒い。

私は、此時たけつくづく貧乏がイヤだった。

私の貧乏は、其時に始つた事ではない。學生時代は、可なりひどかつた。私の學生時代は、卅六年の秋から卅九年の春に至る二ヶ年半であつたが、其頃でも一ヶ月十五圓の學費は窮屈だった。如何に儉約しても下宿屋へ十圓拂はなければならぬ。間代と食費が九圓、アト一圓は雜費に取られるのである。残る五圓から月謝を二圓五十錢拂ふと、二圓五十錢しか残らない。是が一ヶ月の小遣であつた。

當時、私は、晝は神田の英語學校へ行き、夜は三田の商業學校へ通つたのだが、電車などには到底乗れない。神田へ行くにも、三田へ通ふにも、歩き通した。夏でも冬でも番傘一本。マントや外套は勿論、持たない。東京の雨は横に降ると云ふが、丸の内を通ると、それがハッキリ分る。海上ビルや丸ビルは無論出来て居らず、東京驛すら鐵骨だけで、三菱ヶ原に人殺のあつた時代だから、あの邊一

帯は吹き晒しで、横に降る雨は、腰から下をづぶ濡れにして仕舞ふ。丸の内の雨には随分惱まされた私は生來虚弱なので、よく病氣になるが、病氣になつても醫者にかゝれず、其儘ジツと下宿屋に寝て居なければならなかつた。私の學生々活は可なりみじめなものであつたが、それでも貧乏を怨むような事はなかつた。生れた年に父を失つた孤兒が、伯父の情けで學校へ通へる事を悦んで居た。學校を出ても、貧乏生活だった。二十七歳の秋に今の女房と結婚したのだが、其時紋付はこしらへたけれども、袴をこしらへられぬので、桑原先生のを借りて間に合はしたほどの貧乏結婚だった。それでも貧乏を怨むような事はなかつた。

處が、子供が死んだ時は、つくづく貧乏を情けなく感じた。私の懐に金があつたならば、子供は死なずに済んだであらう。名醫の治療を受けさせたら、子供は助つたに相違ない。私は親として義務を盡さなかつたような氣がしてならなかつた。——アトで訊くと、それは全く其通りであつた。私が子供の死亡届を出すさ、早速警察醫がやつて来て、キヨ子の病氣は腦膜炎でなくて疫痢であると診断し

た。疫癘なら早く相當の醫者に診せて適當の治療を施せば助かるのだから、私の貧乏が私の子供を殺したようなものであつた。私は家を出た時、そう云ふ豫感がしてならなかつたので、貧乏を啣ちながら、眠不足な、ぼやけた顔をして、三田豊岡町の桑原先生の家へ辿り着いた。

先生夫婦は、相變らず温顔で私を迎えて呉れた。そして、私が我が子の急死を語り、借財を申込むと、快よく承知して呉れた。借りた金は三十圓だが、當時に於ては、元より大金だつた。是れで、私は、せめてトムライだけでも、人並みに出し得ることを悦んだ。

私はその歸りに社へ電話を掛けた。變事を知らせねはならぬし、原稿の事も氣になつてならないからである。

『私の方は子供の事だから、かまはなくともよい。精々原稿を書いて貰ひたい。』  
と、相澤君と佐藤君とに頼んだ。それから坊さんと呼ぶやら、通夜をするやらし、焼場へ送つて、骨を受取るに、アトの始末は一切女房任せにして、急ぎ社へ出た。それは、子供が死んでから、三日目

のひる前だつた。

(III)

子供の葬式を済まして、社へ出たら、其處に三つの難問題が横はつて居た。

(一)二月號の原稿を短期間に書かねはならぬ事。

(二)印刷所を捜し當てねはならぬ事。

(三)金の工面をせねはならぬ事。

であつた。

原稿は毎月十日頃から書き出し、二十四五日頃までに書き上げるのであつたが、其月は正月であつた爲め、氣乗りがせず、一日延はしにして居るうちに、突然子供に死なれたのであつた。私は子供の弔ひをして居るうちに、原稿の事が氣になつてならず、相澤君や佐藤君に大に奮發して呉れるように

頼んだのだが、兩君も、私の不幸を見ては、気が落ち付かなかつたものと見て、社へ出て見ると、未だ原稿は一枚も書いてない。

締切は迫つて居る。アト二三日しかない。それまで原稿をどうして書くか。

三人が、三日三晩、晝夜ぶつ通しに書き續けても、到底書き切れない。

然も、單に此問題だけなら、發行日を四五日おくらせは、済むが、それと同時に、印刷所を捜したり、金の工面をしたりせねはならぬので、事體が紛糾した。

印刷は最初博文館印刷所に頼み、二號から教文館印刷所にした事は、前に書いたが、其教文館印刷所が大正二年限り閉鎖したので、我々は又別な印刷所に頼まねはならなかつた。

昔、社會主義の雑誌は、印刷所の發見に大苦心をしたものだが、我々はそれほどなかつたにしても、決して無雜作なものでなかつた。前にも一寸述べた如く、我々小雑誌は大印刷所が相手にして呉れない。分相應な印刷所となるに六號活字がない。(其時は全誌六號三段組み)六號活字のある小印刷

所は、廣い東京でも数が少ない。

教文館印刷所が大正二年限り閉鎖する事は、前々から分つてゐたのだから、我々は暮のうちから印刷所を捜した。殊に年が變つてからは、問題が急になつたので、佐藤君が専門のようにして捜した。それでも中々見當らなかつた。

それに、此問題には、金が關聯して居る。初めての印刷となるに、半分前金を取られる。其頃、一回の印刷料は百一二十圓であつたから、之に五六十圓の金が必要であつた。其上、晦日も間近くなつて居る。旁々、茲でどうしても百圓か百五十圓の金を工面せねはならなかつた。

私は一時途方に暮れた。そして愈々私が没落する時期が來たと思つた。私は元々雑誌など發行して行ける柄ではない。所詮、三號雑誌に終る可き運命であつたのだ。それが兎も角も八號、九號と出して來たのは、寧ろ不思議である。私は心中窃に没落を覺悟した。然し、只潰れるのは馬鹿らしいから出來るだけの努力をして、然る後ち潰れようと決心した。

それに、三問題を一度に片付けようとしても、駄目だ。一つ宛片付けて行つた方がよい。それが出来なくて、潰れるれば、それまでの運命だ。幸ひ三つ旨く行けば、何より仕合で、雑誌の発行を續けて行けるを考へた。

そこで、先づ原稿を書く事にした。印刷所が見當つても、金が出来ても、原稿が書けてゐなければ何にもならぬからである。

原稿を書き出してからは、それに熱中した。印刷所の事も、金の事も一切考へずに、只々原稿を書く事のみ心掛けた。

すると、一心と云ふものは恐ろしいもので、筆の進行が寃棒に早い。それへ持つて来て、執筆時間が長い。夜は何時にならうとも、書けるまで書き、疲れると其處にゴロリと寝る。眼が覺める時、又書き出す。と云ふ風だから、一晝夜二十四時間の内、二十時間位書ける。それを三人が競争的にやるのだから、随分能率が擧がる。そこで、平素なら、半月掛る處を、五日位で書き上げて仕舞つた。其

代り、出来の悪い原稿もあつたが、少々位の出来不出来は、其場合問ふて居られなかつた。

原稿が出来たから、次に金の工面に出掛けた。それは一月の二十七日であつたように記憶して居る金の工面と行つても、借に行くのではない。貰ひに行くのだ。我々の雑誌に寄附して呉れそうな先輩の所へ行つて頼むのである。

私は、其前夜、誰の所へ行かうかと考へた。斯う云ふ場合だから、面倒臭い人の所へは行きたくないお談議を聴かされる時、イヤになる。生來、ツムジ曲りな所へ、不幸續きで、感傷的になつて居る折柄だから、僅かの言葉尻に腹を立て、短氣な事を仕出来さないうも限らない。優しい同情のある人の所へ行きたい。断はられても止むを得ないが、そうしても腹の立たないような優しい断り方をする人の所へ行きたい。サア、そう云ふ先輩は誰であらうか。

先輩は數ある。然し、金を出して貰ふ先輩は、數が少い。金を出しても恩に着せない先輩でなければならぬ。そして、其上、出し振りのよい先輩でなければならぬ。そうなるに尙更數が少くなる。

然し、其前夜一晚考へたから、此人ならと思ふ先輩が思ひ浮んだ。

そこで、早速、會社へ行つて其人を訪ねた。運よく在社で、たいして待たせもせず、會つて呉れた。私は、事情を打ち明けて頼んだ。そうしたら、譯もなくきいて呉れた。こつちは、前置きを長くして、恐る／＼頼んだのだが、先方は極めて無難作に承諾して呉れた。大家にすれば、たいした金でなかつたからであらう。それで第二の難問題が、忽ち解決されて仕舞つた。

此吉報を齎らして社へ歸ると、印刷所を捜しに出た佐藤君も手頃のを見付けて來た。翌日半金を付けてやるこ、スラ／＼印刷を引受けて呉れた。これで難問題が全部解決されて仕舞つた。そして我々は没落を免れた。其代り、發行日が大に遅れ、五日の發行が十五日になつたが、それでも大に仕合たつた。

## 一 周年

(一)

最初の難關をさうにか切り抜けて、二月號が出來た。續いて三月號になると、手頃の印刷所が見當つた。二月號を刷つて貰つたのは、銀座四丁目の福音印刷と云ふのであつたが、植字の間違がヒドクて、さうにも我慢が出來ないので、更に他の印刷所を求めたのである。

新しく得た印刷所は京橋弓町の三協印刷であつた。是れは、小さくなく、大きくもなく、其上仕事が大丁寧で、我々には理想的のものであつた。誰の紹介で此印刷所を知つたのか、今記憶がない。たゞ我々は、此印刷所から愛想をつかさねぬよう、極めて大切に取扱つた事だけは、未だにハッキリ記憶して居る。

雑誌は、給料が拂へなくとも潰れるものでなく、原稿料が滞つても、潰れるものでない。この方はさうにかして行くものである。現に我々は創刊以來一月も給料を満足に取つた事がない。金が這入つて来て始めて分配をやるのだから、定つた給料目とてない。又、一度に纏めて給料を取り得た事もない。一ヶ月に幾度もちよい／＼取つて、それを累計するのである。だから、自然過不足が出る。勿論、剩る方が少くて足りない方が多い。足らなければ、翌月補ふのだが、補はれぬことが多い。それでも誰一人不平を云ふ者もなく、至極圓滿に共同事業をやつて来た。原稿料に至つては、殆んど拂はない。それでも、書いて呉れる人は矢張り書いて呉れる。然し、印刷所とすると、そうは行かない。是れは純然たる商賣關係だから、拂が出来なければ断られる。然も、甲の印刷所に断られると、乙の印刷所は引受けて呉れない。我々は、幸ひにして、今まで、印刷所に不義理はしなかつたが、二月號は教文館印刷所の廢業でヒドイ目に遭つた。あの時は、色々の事故が重なつたにもせよ、印刷所が安泰であつたならば、あれほど心配はしなかつたであらう。そこで、我々は、今度見付けた印刷所が、い、印

刷所であるだけ、それだけ多く印刷所を大切にしたい。

印刷所を大切にすることに就ての要件は色々あるが、其中に最も重要なものは、何と云つても金拂ひの正確と云ふ事である。他の事を凡べて旨くやつても、此一事を正確に運ばないと印刷所から信用されない。處が、當時のダイヤモンドの如く、廣告料と寄附金を主要財源として居る雑誌は、収入が不定だから、拂ひが正確に出来ない。出来ないこと云つて其儘にして置けば、肝腎の印刷が不安定の状態に在るのだから、私は自ら進んで印刷所へ保証金を提供する事にした。そうすれば、印刷料の拂ひが少し位滞つても、断られるような事がないからである。

印刷所は無論此方法を歓迎した。注文の際、半金を前金に取る事でも、客によつては、随分苦情を並べるのに、自ら進んで保証金を提供するのだから、歓迎するのは當然である。其代り、こつちは保証金を手に入れるのに、随分骨を折つた。提供の保証金は百圓であつたようである。百圓は當時の我々には大金だ。骨を折つてこれだけの大金を手に入れて、印刷所へ提供し、それを全然別物したのた

から、以て如何に我々が印刷所を大切にしたらか、分らう。

之を済したら、我々も小康を得た。其折柄に一週年が来た。一年経つても、一向發展はしなかつたが、三號雑誌が多い世の中に、兎も角も、一週年を迎えたのは有意義である。それに一週年記念號には、廣告も少々餘分に取れたから、一つお祝ひをしよう云ふ事になつた。

それには、只飲むのは風情がない。何處かへ出掛けよう。出掛けても、日歸りは忙しない。一泊掛けと洒落りたい。一泊掛けとなれば、今なら、箱根か熱海と云ふ所だが、當時、あゝ云ふ所は、貴族の行く所とのみ心得て居たから、誰も言ひ出す者がなかつた。大奮發で取極めた先きが三浦三崎であつた。靈岸島から船で行けば、何十錢で済む、一泊料が何程、一行何人で、これだけあれば足りる云ふような處から打算したのである。

出掛けたのは何日であつたか。古い雑誌を繰つて見ると、五月三日になつて居る。なぜ、雑誌發行後にしなかつたものか。それが待ち切れなくて、校正の終り次第出掛けたものらしい。無論旅費は才

覺したもので、廣告の前金か何かを貰つたものと思はれる。一行は七人であつた。

相澤 周介  
佐藤 武雄  
吉田 朝次郎  
内山 吐蚊  
佐田 富三郎  
宮原 維清  
石山 賢吉

一行に洩れたのは、河原繁藏と云ふ給仕と勝手元の婆と弊社に編輯の助手をしながら、苦學をして居た宮本茂吉君とであつた。此時の社員は十人であつた。創刊當時の三人が三倍になつた譯だが、是れは發展の結果ではない。手元逼迫の爲めである。

赤坂引越の際に入社した澤村幹三君が我々を調和の出来る人物であつたならば、此時の社員は、給仕に勝手元の婆を加へた位なものであつたらう。處が、澤村君は敏腕家だけに、鈍牛式の我々は意見が合はない。事毎に衝突する。そこで在勤僅か五六ヶ月にして退社して仕舞つた。

サア、敏腕家の澤村君が去つた跡だから、其補充が容易でない。池田藤四郎氏の紹介で、最初吉田朝次郎君が入社した。彼は筋肉隆々として居つて、骨力秀で、角力に掛けては並ぶ者が無いが、廣告取りは下手たつた。吉田君の補助に内山君を入れた。それでも澤村君の半分も行かない。更に、宮原君を入れ、佐田君を入れたのである。

此内、内山、宮原、佐田の三君は、最近の入社で、二月號に随分悩まされたから、爾後を慮つて此三君を迎へたのである。それにしても、主要社員七人の内、四人まで廣告取は我ながら驚いた次第であつた譯である。

## (11)

辛苦の一年を経て、記念號の編輯を終り、三崎行を決定したのだから、一同大喜びで、前景氣が素晴らしい。寄るこ觸はるこ其話で持ち切つた。就中、問題の中心となつたのは船であつた。

三崎行の船は客船ではない。魚船である。魚の運搬を本業とし、其傍らに人間を積むのだから、設備は極めてお粗末である。設備のお粗末は忍ぶとしても、船體が極めて小さい。ポツポツ蒸氣の毛の生れた位なものだ。東京灣内の航行でも、動搖が氣支はれる。生憎、私は、船には極めて苦い經驗を持つて居る。六七歳の時たつた。私は母に連れられて新潟から直江津行の船に乗つた。乗るこ直ぐ蒸し熱い蒸氣に交つてペンキの匂がブーンと来る。是れで先づ幾らか氣持が悪くなる。それから船が動き出すと、眩暈と嘔吐で、七頭八倒の苦しみをした。其印象が幾年経つても消えない。生れて初めて船に乗つて、永劫記憶の去らない苦しみをしたのだから、船となるこゾツとする。お互の手前弱い音



は出したくないが、目前に迫る問題だから、曾遊の相澤君に様子を訊いて見た。

『ナニ、大丈夫だ。』

と云ふ。相澤君は大丈夫でも他の人はと問へば、

『酔ふ人は酔ふ。』

と云ふ、幾何學の公則みたいな答へであるが、其酔ふ人の酔ふのが氣に懸る。他に船を氣にして居る者はないかと見渡すと、誰れもそんな顔付をして居る者はない。殊に佐藤君などは、

『吾輩は立海灘を三度も往復して居るんだ。』

と力み返つて居る。吉田君は房州の生れで、海に育つたのだから、船などはてんで問題にしない。佐田君も朝鮮往復の経験を語つて大威張りである。唯獨り内山君のみ沈黙して居る。其沈黙が少々怪しいので、誰か、

『君は駄目か。』

と問ふと、彼は急に元氣付いた調子で、

『僕だつて何でもない。』

と云ふ。即ち皆な無事である。大勢が斯うあつては、さうする事も出来ない。私は心中ひそかに當日海上の平穩を祈つた。

愈々出發の五月三日となつた。此日は午前六時迄に靈岸島參集と云ふ約束たつた。前夜から雨たつたにも拘らず、一同キチンと集まる。朝寝坊の連中としては非常な奮發である。處が只一人内山君が見えない。内山君は其名を吐蚊と云ふ。無論、本名ではない。誰か、献上した雅號である。吐蚊はトブンをもじつたもので、溝におつこちてさうさかしたと云ふ本人の話しが如何にも滑稽たつたので、それを其儘彼の別名にしたのである。

斯う云ふ男だから、自然下馬評もはげしい。さうして彼は遅れたか、又、溝へおつこちたか、女房に引き留められたか、それとも電車の事故か、朝寝坊か、甲云ひ、乙云ひしながら、彼を待つたが

時間が来てはさうする事も出来ず、延着不審の彼を残して、一同促さるゝ儘、艇に乗つて本船に移つた。蕭々と降る春の雨も海の上では風情がない。四面濛々たるのみである。船の強い連中は甲板の眺がないのを残念がつたが、初めからさう云ふ希望を持たない私には、何の感じも起らなかつた。私は只、船に酔はない事のみ心掛けた。そこで、船室に入るや、直に寝た。船の動かない前から寝た。船室は狭くて穢い。三疊敷位であつたように記憶して居る。大入満員で、はみ出しそな光景たつた。

相澤君が書いた紀行文を見ると、同船の客、吾等を加へて十二三人。丸髻の神さんと、十六七の桃割と、小僧と學生と商人風と職人風と、外に六十ばかりの婆さんあり、自ら稱して三崎の天ぶら屋なりと云ふ。婆さんよく喋べり、よく笑ふ。關取の應對最も要領を得たり。さある。

關取とは吉田君の事だ。平素は無口の男だが、此時だけは婆さんの相手になつてよく喋つた。それには少々酒も手傳つたらしい。誰が忍はせて来たものか、正宗とスルメが用意してあつた。相澤、佐田、吉田の三人は、それでチビ／＼やり出した。話相手が欲しい處へ、天ぶら屋の婆さんが陽氣で喋

べるものだから、酒で口の軽くなつた吉田君が面白く應對したのである。本來ならば、此應對は佐藤君が勤む可きであつた。佐藤君は婆さんを扱ふに妙を得て居る。我々は赤坂の家に移すに勝手元當の爲めに、一人の女中が必要になつた。其周旋を近所の桂庵に頼んだ處、是が縁で桂庵の婆さんが時々やつて来る。其の應對を佐藤君が一人で引受けて居たのだが、それが旨いを見て、婆さん中々の御機嫌である。

『獨身では何に彼に不自由でせうから、モット氣の利いた女中を……』

さまで發展したものだ。是れには流石の佐藤君も恐れ入つて仕舞つたが、兎に角我々は婆さんと云へば、佐藤君に限ると思つて居た。處が、此日は、佐藤君一向に氣焰が揚らない。好きな婆さんが居ても相手にならない。平素嗜む正宗も口にしない。さうした事かさ皆が不思議に思ふけれど、其原因が分らない。そのうちに船が羽田沖にさし懸つた。すると、佐藤君の顔色が蒼白になり、座に堪わなくて、到々ゴロリと寝て仕舞つた。これで其原因が分つた。佐藤君は船でやられたのである。

すると、他の連中は頻に佐藤君をからかふ。

『オイ、玄海灘君さうしたんたい。』

『船に酔ふなんて、弱蟲だナ。』

『起きて一はい飲み給へ。そうすると船暈などは屁でもないから……』

などと、交る／＼云ふ。云はれて佐藤君はくやしそうだが、気分が悪いからさうする事も出来ない。

ジツト辛抱をして居ると、一方は益々調子に乗る。中にも佐田君などは佐藤君の船暈を浪花節に仕組んで唸り出すのであつた。佐藤君遂に疝癩玉を爆發させて室外に退去を迫つた。

(三)

佐藤君に怒られて、正宗黨の三人は、甲板へ出て行つた。幸ひ、雨は小降りになつたようだが、また霽れはせぬらしい。

私は、意外にも、船に酔はない。船が観音崎の難所へ掛つても、何ともない。

『ハテナ。自分は船に強いのかナ。それとも、寝て居る功德かナ。』

などと考へて來た。

斯うなると、自分で自分を試験して見たくなる。

私は先づ起きて見た。寝て居るよりは、動搖の感じがはげしいが、それでも何ともない。

座つた儘、暫く時を過ごして見た。矢張り何ともない。

私は、それで、スツカリ自信を得た。自分は、船に酔はないと云ふ……。

船に酔はないと極まれば、薄穢い船室に小さくなつて居る必要はない。私も、甲板に出た。

雨は霽れて居た。雲もところ／＼切れて居た。然し、三人の姿は見ゆない。只、キヤツ／＼云ふ聲のみ聽へる。

三人は船長室へ押し掛けて行つて居るのであつた。そして、其處に、酒盛りをやつて居るのであつ

た。先刻より盃の数が重つて居るから、氣焰が高い。船長もいける口と見れて、相手になつて面白そうに飲んで居る。ごちらも、人みしりをしないで、四海同胞の實を示し、天下泰平の光景であつた。私は、酒の仲間へ這入れないから甲板に佇み、雨上りの海上を眺めて居た。相澤君が其時 光景を次の如く書いて居る。

観音崎の臺場を過ぐる頃、雨漸く斂まり、雲間遙に碧空を見る。風、横さまに船をうつて、舷頭飛沫ほさはしる處、欲しきは我に美音なりけり。

相澤君は、法律専攻に似合はず風流な人で、趣を欲する。そこで、一名趣居士と云ふ。簡単な紀行文の一節にも、よく其氣分が現はれて居る。『舷頭飛沫ほさはしる處、欲しきは我に美音なりけり』なんて、君一流である。

さかくするうちに、船は三崎へ着いた。着いてからまご／＼するのは氣が利かないと云ふので、宮原君を宿屋選定係にして置いた。彼は若冠なれども、人ご人との對話に長じ、澤村君去つて以來の外

交家であつた。

そこで、宮原君が先頭に立つ。然し、この宿屋がどうであるかは、船中で調査済みになつて居た。何と云つても、調査が本業の我々だから、こんな事は譯もなく運ぶ。佐藤君の逆鱗に觸れない前、吉田君が例の婆さんから聞いたのである。

『第一等が岬陽館、次ぎは何さか屋に何さか屋。……それから私は何さか横町を曲つて、何軒目の天ぶら屋だから、食ひに来て下さい。』

と、口の軽い婆さんは自家廣告にまで及んだ。

三崎となるさ、我々でも高を括る。切り詰めた豫算旅行の癖に、宿屋は第一等の岬陽館と決定したこれで、宮原君の肩が半分抜けて、アトは其宿屋が誰の紹介もない我々一行を、泊めるか泊めないかの問題だけになつた。

宮原君は之に大に腕を揮ふ積りたつたが、行くさ、直ぐ、何のこたはりもなく、スラ／＼と、二階

の大廣間に通された。それは其筈で、此宿屋は三崎第一と云つても、一向立派ぢやない。神田あたりの下宿屋と、たいして變らない。家が大きくて、海に臨んで居る位なものだ。其上、季節が季節だから客は一人もなく、全部ガラ空きと來て居るのだから、無條件で我々一行を受け入れたのは、當然である。

宿屋に落ち付いてからは、晝も夜も飲んだ。そして、其間に、船に乗つて、海上にも遊んだ。海上に遊ぶ前、内山吐蚊が飄然とやつて來た。どうしたかと問へば、船に遅れたから、陸をやつて來たと云ふ。何たか怪しい。彼は矢張り船が怖かつたらしい。女中に一人、色白の美人が居た。年は二十五六房々とした髪毛を銀杏返しに結つて、日本橋あたりで見るタイプの小粋な女であつた。一同、所に似合はぬ彼女を見て、アツと云つた。處が、二度見て又アツと云つた。彼女は半面の美人であつた。右か左か忘れたが、片一方の頸に、ルイレキを切つた跡がまぎ／＼と残つて居たのであつた。

他に今一人の女中と小娘とが居た。いづれも、此地方の育ちらしい。色が黒くて、不恰好で、女離

れのしたのであつたが、それでも、一同はルイレキとそれを相手にして大に騒いだ。

私は此宿屋で佐田君と初めて將棋を指した。佐田君と私は、段違ひの將棋であるが、知らないから平手で指した。そうしたら、不思議にも、私が最初二番勝つた。それから後は三番ばかり負けた。それでも、其時、私は、佐田君より將棋が弱いと思はなかつた。處が、東京へ歸つてやるさ、どうしても叶はない。遂に角一枚引かれても叶はない事が分つた。佐田君は其頃から將棋の格をなして居たのであつた。

翌日は快晴であつた。豫定通り三浦半島を歩いて歸らうと云ふ事になつた。處が、相澤君が動かない。二日酔で頭が重いらしい。そこで、附添に佐田君をも残し、我々五人は五里の山道を歩いて歸つた。残つた二人は、其の儘夜を待つて、例の魚船で歸つた。然し、相澤君は此事を次の如く書いて居る。

歸路陸行を望むもの多く、遂に二組に分れ、陸行先發し、舟行夜を待つ。蓋し、舟行はヘコタレ者

陸行組に至つては御苦勞様のみ。問ふ勿れ、小生は何組ぞ。無論舟行、悠々として養驛を食れり。陸行舟行の消息を知らず、舟行亦陸行の行動を察せず。怨みこなしに爰に欄筆す。なんて、いゝ氣なものである。此邊は筆持つ者の役徳さしななければならぬ。

## 經營新案

(一)

一周年記念號で安逸を得たのは、ホンの一時、それから又直ぐ經營難に悩まされた。經營難になるぞ、社員が安定しない。一周年を少し過ぎた時、皆川省三君が入社して大に悦んで居るぞ、佐藤君が退社した。それから内山君が去り、宮原君が去り、吉田君が去り、代りに日枝久雄君が入社した。一年はかりの間に半數近い社員が移動したのであつた。

一つの仕事をやつた事は、ごなたも經驗された事と思ふが、仕事をして行く上に於て、何が煩はしいたつて、人事問題ほど煩はしいものはない。金のないのも苦しいが、それにまさる苦しみは、人事のゴタ／＼である。一度、此問題に逢着すると、頭が腐つて仕舞ふ。實に厭な問題である。其厭な問題が幾つ／＼やつて來たのだから、悩まされる事、一ト通りでなかつた。

其結果、私は大に考へた。

人事問題を主として惹起すのは、廣告取である。いつぞ、こんな者を置かない事にしようぞ。

元來、廣告取を置いて廣告を貰ふほど不經濟な事はない。我々の社の廣告取は歩合制度であつた。廣告取が廣告を取つて來ると、それに二割の歩合を拂ふ。廣告を取る取らぬに拘らず、月々若干の手當を拂ふから、其負擔が少くとも一割になる。それで先づ廣告料の三割が消れて仕舞ふ。それから印刷所へ拂ふ組代、刷代、紙代が一頁に五六圓掛る。だから、一頁二十圓で廣告を取つて來ても、それはそれで十二三圓取られ、社の實收さなるのは、僅か七八圓に過ぎない。然も一頁二十圓の廣告は

當時に於ては、減多に取れない上等廣告であつて、大概一頁十五圓位のものであつた。十五圓たゞ、社の實收が一頁五圓前後に減じて仕舞ふ。先方から貰つて来る廣告料の三分の一である。

我々の雑誌に載る廣告が全部商賣的のものであつたならば、それでもよいだらう。處が、そう云ふ廣告は極く僅かしかない。大部分は義理廣告である。廣告と云ふ名の下に、一種の寄附を受ける義理廣告である。先方は、廣告など、出しても出さなくとも、さうでもよい。寧ろ出さない方を希望する廣告を出さないで、只金を貰ふと乞食じみるので、面目保持の上から、こちらが出して貰ふのだ。手取り早く云へば、廣告—實は經營の援助金である。其援助が三分の一しか實効をなさぬとあつては、先方へ對して、甚だ相濟まぬ次第である。これは是非改むべきものと考へた。

それから、今一つ、廣告取に弊害がある。我々の使用する名刺は、本來、記者は記者、廣告取は廣告取と明かに印刷して行くべきものだが、そうはしなかつた。皆記者と云ふ肩書にして居た。廣告取では先方が會つて呉れないから。詰り、廣告取が記者のような顔をして、會社を訪問して居たのであつた。

此政策は、最初或程度まで成功した。若年の廣告取に大會社の社長が無雜作に面會したと云ふ珍事もあつた。然し、それだけに、屢々これを用ゐることに依つて、効能が薄くなつて來た。無論そうなるのが當然で、先方たつて馬鹿ぢやない。記者と思つて面會したら、金ねたりの廣告取では、爾後警戒するに極つて居る。

そこで、記者の肩書でも段々面會が困難になつて來た。然し、單にそれだけなら未たい。廣告取は元來面會が容易でないのだから、それがそうなつた處で、以前へ復歸したまでの事だ。處が、茲に困つたのは、純粹の記者が其卷添ひを食ふようになつた事である。先方では、それが本當の記者で、それが偽記者か、分らないから、本當の記者が訪ねて行つても、廣告取たと思つて斷はる。それで廣告取でない純粹の記者まで面會率が甚だ悪くなつた。

私は、これは實にいかん事たご考へた。抑々我々がダイヤモンドを發刊したのは、何の爲めである

か。經濟事情を正確に調査して、世間へ傳へる爲めである。それであるのに、會社の重要人物に會はれないで、さうするか。これでは、我々の目的を達する事が出来ない。目的を達せられなければ、廢刊した方がましである。此點からも、私は、廣告取は廢すべきものと考へた。それに、廣告取と云ふ奴は、よるごたかるご廣告の咄ばかりして居る。ヤレ、ごこの會社のさねつがケチたごか、わからず屋たごか、幾度行つても面會しないごか、口穢く罵り合ふ。私は、町人の子であるけれど、さう云ふ話は大嫌ひだ。私は、成る可く、さう云ふ話は、聞かないようにしたが、それでも、直ぐ脇に喋つて居るのだから、聽へる。時として、自分が經營者たるの責任上、進んで聞かねばならぬ事もある。それで、自分も、段々廣告取臭くなつた。こんな事ではいけない。私たつて人間だから、自分が貰ひにやつた廣告を斷はられ、は、い、氣がしない。それが積り積ると、筆に現はれる。神聖なる筆に曇りが生じて來ては、權威ある經濟雜誌になれない。かたぐい、以て、私は、廣告取は斷然廢すべきものと考へた。

此事を新入の皆川營業部長に相談すると、趣意は誠に結構だが、さうして勝手元の賄ひをつけるか  
と云ふ。

無論、廣告取を廢せば、それに代はる方法を案出しなければならぬ。其方法はこれくたご、皆川君に話した處、彼は成程と感心した。

(II)

廣告取を廢しても、廣告を取らぬのではない。雑誌の賣上益だけでは、社の維持が出来ないから、不本意ながら、矢張り廣告は取らねばならぬ。

然し、廣告取を廢すと、廣告取を置いた時ほど廣告を取らなくともよい。廣告を取る爲めの出費だけ廣告収入を減じ得るのである。

私は、廣告取を廢すに就て其點を計算して見た。



其頃、廣告取に、手當や歩合を毎月百數十圓拂つて居た。外に廣告を誌上へ掲載する爲めの出費があり、それを加へると、其經費は二百圓を超えて居た。廣告取を廢せば、則ちこれだけ廣告収入を減じ得るのである。それが全廣告収入の略半分に當つた。

廣告は、取るに骨の折れるものであるが、其全部がそうなつて居るのではない。中には易く取れるものもある。そう云ふのは、我々の善行を嘉し、同情的に呉れる廣告である。私は、今まで書いたように、弊誌を創刊して、随分困窮したが、その爲め筆を曲げるような事は曾つてしなかつた。即ち、是は是、非は非とし、寸毫も情實を交へるような事はなかつた。それで感情を害した向もあるが、識者は我々の態度を認めて呉れて、同情廣告が次第に殖つて來た。當時それを計算して見たら、全體の半分位あつた。

斯かる廣告さて、絶體に勧誘を必要としない譯ではない。矢張り勧誘をしなければ貰へない。然し其勧誘は極めて軽いものでよい。廣告取がするようなシツコイ勧誘を必要としない。記者が片手間に

する勧誘で澤山である。一步進めれば、手紙の勧誘でも間に合ふのである。然も、此廣告が取れ、は廣告取を廢止しても、社の實收に變りがない。

私は、此事を皆川君に話した處、同君も合點した。

そこで、早速、廣告取廢止に極めた。そして、記者が廣告取を兼ねる事にした。

但し、記者たさて、廣告取を度々やるに、終ひには廣告取と同一に扱はれて仕舞ふ。そうなつては廣告取を廢止した趣意が徹底しない。そこで、記者は記者らしい廣告の勧誘をする事にした。

それはさう云ふ事かさ云ふに、廣告取のような懸引をしないのである。實情をありの儘に話す。そして、過分の要求をしない。今迄これだけの廣告を貰つたから、今後も是だけ貰ひたい。詰り、年二回なら二回、三回なら三回と要求し、其承諾を得たならば、決してそれ以上の勧誘をしないのである。斯う云ふ風に方針を極めて、それから其後はその通り實行した。そうしたら案外成績がよかつた。これまでより収入は少くなつたが、差引は却てよくなつた。

と云つても、無論、懐は樂でない。先輩にたいした迷惑も掛けずに、切り詰めてやつて行けること云ふだけのものであつた。

丁度、其頃、我々を慰めに來て呉れる一人の先輩があつた。それは鈴木恒三郎氏である。

私が、初めて鈴木氏を知つたのは、實業之世界の記者時代であつた。最初は唯記者として訪問したゞけであつたが、度々訪問して居るうちに、氏は私に、決算報告の見方に關する二つの方法を教へて呉れた。私は之を基礎にして決算報告の見方を案出した。氏は、私に對しては、決算報告の見方の先生である。其因縁からして私は大に氏を尊敬するようになった。氏も亦私を可愛がつて呉れ、弊誌を創刊してからは、屢々寄稿なごして呉れた。其上、時々弊社を訪れ、

『君達のように、毎日まづい物を食つて働いてはかり居てはいかん。僕が一つ御馳走をしてやらう。

サア〜皆んな來給へ。』

と云つて、四谷の三河屋で牛肉を御馳走して呉れるのであつた。三河屋の牛肉と云へば、東京名物の

一つになつて居る位だから、今でも勿論御馳走である。況んや、其當時に於てをや。それに、鈴木氏の御馳走振りがいゝ。鈴木氏は最初からお代りを注文する。其お代りも一人前宛ではない。

『オイ、姐さん、お代りをたんご持つて來い。一人前や二人前ぢや埒があかん。五六人前を一度に持つて來い。』

と、命ずるのである。女中は牛肉の皿を山ご積む。鈴木氏は

『サア〜食べよ。』

と勧める。實に氣持のいゝ御馳走振りであつた。

鈴木氏は古河家で日光製煉所の管理を引受け、三千の職工から慈母の如く親まれた。我々は、我々への御馳走振りを見て、其偶然にあらざるを知つた。氏は我々の事を心配し、會ふ度毎に

『さうだ。』

と訊く。一向發展しないから、其儘正直に答へる。鈴木氏はそれに同情しながらも、我々を勵まし、

『イヤ、雑誌がいゝんたから、そのうちに發展する。發展さ云ふものは、階段のように一段々登つて行くものぢやない。力が内に溜つて、それから上へ跳ねあがるのだから、イザ發展さなるご、想像以上の發展をするものだ。』

と云つてれた。是れは、鈴木氏が日光製煉所管理の實驗から云つたのであつたが、弊誌が其後發展した時は果して鈴木氏が云つた通りであつた。即ち最初の三年間は二千五百部の發行部數が一部も殖へなかつたが、其後急激に發展して遂に最高二萬七千部に達した。

## 伊藤 監修

(一)

大正四年の春の事。或時、福澤桃介氏に會つたら、

『伊藤さんが獨逸人に就いて面白い話をして居た。筆記させて貰つて、ダイヤモンドへ載せたらさうか。』

と、注意して呉れた。

伊藤さんは、伊藤欽亮氏の事である。氏ならば、日本新聞で使つて貰つたから、よく知つて居る在社中、特に、私は、色々の經濟問題を教へて貰つたので、日本新聞を出ても、蔭ながら、先生として尊敬して居た。先生は國民經濟の蘊蓄が深い。其上、觀察が鋭敏で、態度が立派だ。常に、國務大臣の見識を以て、堂々論陣を張つて居る。經濟論客としては、正に當代隨一である。先生の獨逸人觀は面白いに相違ない。然も、當時は、獨逸が歐洲列強を相手にして、乾坤一擲の大戦争を始め出した時だから、先生の獨逸觀は何人も聞きたがるに相違ない。私は福澤氏の注意を感謝し、早速、北品川の自宅に伊藤先生を訪ふた。

折よく在宅で、二階の書齋へ通された。

今でも覺えて居るが、其時先生は非常に衰れて居た。そして、漆黒の頭髮が眞白に變つて居た。日本新聞の社長室で見た時とは、丸で別人であつた。さしたのたらう。僅か、二三年の間に頭髮の房々とした紳士が白髮の老人に變つたのたたら、私はビックリした。後で聽くと、其當時、頭髮の變り方はげしいのには、家庭でも驚いたと云ふ事である。

私は、先生に對して、失禮になつては……と思つたから、口には何とも云はなかつたが、心中には先生の苦勞を察して、暗然とした。私が小雜誌を經營してさへ其難儀は一ト通りでない。況んや新聞をや、先生が日本新聞を經營しての苦勞は、非常なものであつたに相違ない。おまけに其社を不良少年に火を附けて焼かれ、廢刊の止むなきに至つては、悲痛の極である。剛腹の先生と雖も、精神の動搖を免れまい。頭髮の急變はその爲めと思ふと、急に私の感情は動いて涙ぐましくなつた。

然し、瘦我慢の強い先生は、そんな事はおくびにも出さなかつた。私が火災や廢刊の見舞を云つても、唯有難うと云つただけで、それに無關心の如く、直に經濟國策を語り出すのであつた。

私が筆記をしようとするに、先生はそれを抑えて、吾輩の議論がよけりや、健康の回復次第書いてやるよと云ひ、其儘議論を續けた。

議論は、こつちで望む獨逸觀であつた。獨逸の、貿易發展の顯著なる事と貯蓄の旺盛なる事を説き我國情を顧みて其貿易が歐洲の最小國——白耳義にも及ばざるを慨し、經濟發展の第一要義として、生活改善と勤儉貯蓄の必要を力説するのであつた。

相變らずの氣焰で、元氣は以前と少しも變らなかつた。

議論が終はると、先生は更に一段聲をあげまして云つた。

『吾輩が、此大切な時機に於て、言論の機關を失つたのは残念であるが、な—にツ、普及の方法は幾らでもある。口運は辻説法をやつた。吾輩も之に倣はうと思へば、何でもない。』

と。此時、先生の顔に幾分昂奮の色が見えた。私は日本新聞で先生に師事する事二年に及んだが、曾つて一度も斯かる事は経験した事がなかつた。日本新聞を廢刊するに就いては、餘程の決心を要した

ものと察せられた。

議論は盡きないが、お晝近くになつたから、辭去した。辭去する時、先生から一葉の新聞紙を買つた。それは、日本新聞で、題號保存の爲めに出した臨時號であつた。電車の中で読んで見ると、私が話を聞いたと同じような事が、先生一流の氣概に富んだ文章で綺麗に書いてある。私は、是れ幸ひと思ひ、其旨斷り書きをして五月一日號に轉載した。此轉載號が出るに、間もなく、先生の所から電話が掛つて來た。少し話したい事があるから、北品川の宅へ出向いて來いよ云ふ事であつた。

指定の時間に、私は先生の宅へ伺候した。

先生は未だ引籠中であつたが、健康は餘程恢復したと見えて、先日よりは顔色が晴れやかになつて居た。語氣もくつろいで居た。

『君の雑誌には、社説がないようだ。あゝ云ふものは、あつても雑誌の賣行が増すものではないが、貫祿にはなる。なんなら、吾輩が遊んで居る間、書いてやらうか。』

と云ふ事であつた。私は夢かとはかり喜んだ。先生の論文を我々の小雑誌へ、社説として載せ得るのは勿體ないほどの有難さである。それと云ふのも先生が、我々の立場に同情し、我々の奮闘を買つて呉れたからであらう。私は、その厚意を謝し、そうして貰ふことを依頼した。

其日は、未だ筆が執れぬとあつて、社説になる事を口述して呉れた。私は、それを筆記して歸り、其事を社中同人に話した。同人も雀躍して喜んだ。そして、一同、百萬の味方を得たような氣になつた。

其翌月は今一度口述であつたが、其翌々月から、先生自ら筆を執つて社説を書いて呉れた。之を載せたのは八月號で、其論題は『放資者は事業に親むの趣味を有せよ』と云ふのであつた。

それから、先生は約束通り毎號社説を書いて呉れた。更に又『金聲銀色』『巷の聲』など云ふ短評も毎月書いて呉れた。何か仕事をすれば、やめるよ云ふ約束であつたから、我々は、先生が何にも仕事をせず、何時迄も我々の雑誌に書いて呉れる事を希つた。

## (二)

雑誌が弗々殖へ出して来た。大正四年の秋頃から……。原因は、歐洲戦争の爲めであつた。歐洲戦争の好影響を受けて、我經濟界が動き出したので、それに連れて、我々の雑誌も殖へ出して来たのである。

丁度、其頃から、誌面も整つて来た。先づ第一に社説が光る。そんな大雑誌へ持つて行つても、不足のない、立派な大社説である。それから、會社記事も馴れて来た。誌面も、新活字の九ポイントで綺麗になつた。今日では、そんな雑誌も新活字を用ゐて居るが、其頃、ポイント型の新活字を用ゐて居るのは、新聞紙だけで、雑誌は依然舊式の五號活字を用ゐるものが多かつた。舊式の五號活字は大きくて不恰好で、誌面が不經濟になる處から、我々は初めから之を嫌つた。そして、其次きの六號活字を用ゐて居た。

處が、六號活字には又六號活字の缺點があつて、決して理想的なものではなかつた。我々は新活字を望んで居た。すると、幸ひにも、印刷所が大正四年の春に新活字の九ポイントを用意した。我々は早速之に取換へて貰つた。そして、從來の三段組みを二段組みに改めた。これで誌面の體裁が非常によくなつた。其上、角の潰れない新しい活字を鮮明に印刷して呉れるので、誠に、明るい、氣持のいい雑誌になつた。當時、此點は何處へ行つても褒められた。小型雑誌の模範ささへ讃へられた。

そのうちに、大正四年が過ぎ、五年が過ぎ、六年となつたが、月日の経つに従つて、雑誌の賣行が益々よくなる。初めに想像しない部數が出るようになった。

そこで、我々は、其勢ひに乗じて基礎を造る事を考へた。それには我々の如き書生同志の寄り集まりではいけない。一人、シツカリした監督者を設けようではないか云ふ議が起つた。賛成々々で、誰一人異存がない。そして、其監督者なる者も、我々の意中には極つて居た。

伊藤先生である。

只、先生が承諾して呉れるか否かが問題だが、幸ひ、我々の雑誌も雑誌らしい雑誌になった。これならば、先生の名を辱めるような事もあるまい。それに、先生は後進誘導の念慮が強い人だから、承諾して呉れぬさも限らぬ。一應伺つて見ようではないかと云ふ事になった。そして、其使に皆川君を選んだ。斯う云ふ事は、皆川君が一番旨いからである。

皆川君は果して使命を全ふして歸つて來た。先生は、弊社の監修たる事を内諾して呉れたのである。一同、大に悦んだ。そこで、私が正式に頼みに行かうとして居るこゝ、お察しのいゝ先生は、皆川君の所へ、追ひかけて手紙を呉れた。『監修』承諾の旨を正式に答へて來たのである。

先生は筆跡が美事な所へ、手紙の文章が旨い。これには、先生自身も大なる自信があつた。西園寺を除けば……と、自ら云ふ位であつたから、其書簡は尋常一様に取扱ふべきものでない。それに、其時の書簡は弊社の歴史に残るものである處から、皆川君は其後それを額に仕立て、自家に飾つて居る書簡の全文次の如し。

拜啓、此程は遠路御來訪の處、何の風情も無之、汗顔の至りに候。倍、其節、御話の件は、小生をダイヤモンド誌の編輯監督の意味か、監修として誌上に署名の御希望、石山君始め御社中の間に有之候趣、其後熟考致し候處、小生は數年來、記事に、論說に、新聞雜誌へ發表したる事は、幾萬言なるを知らずと雖も、名前を署したることは無之、隨て世間に知られ居らざることゆゑ、貴誌への署名が何等の貢獻あるべしとも覺ゆ。併し、一昨年夏以來、小生が貴誌上に執筆せしは随分澤山にて、事實署名以上の仕事は致し居り候ゆゑ、敢て御希望に背く意志も無之、御都合に任せ候而差支なし。但し小生の一身上は今の處浮萍の如し、或は他日署名を辭退する機あるやも測られず、其邊は豫め御承知置きを願度候。先は右申上度如此御座候。

六月四日

欽 亮

皆川賢臺

侍 吏

斯くて、大正六年六月十五日號（其頃は雑誌の發行を月二回に改めて居た）から「伊藤亥亮監修」の文字を雑誌の表紙に刷り込んだ。これで雑誌に貫禄が付き、我々の肩身も廣くなつた。

先生の監修は其後幾年も續いた。二三年で斷られさうな監修が其事なくて済み、遂に先生が先頃世を去るまで續いた。斯くして先生は、弊社に監修たる事十年十一ヶ月に及んだ。社説や短評を書いて呉れた事はそれより長く、十二年四ヶ月に達した。思へば、長い因縁であつた。

それと云ふのは、先生の健康が優れない爲めであつた。先生は大正三年頃から健康が面白くなかつた。日本新聞の廢刊たごて、其直接の原因は火災であつたけれども、詮じ詰めれば、矢張り先生の不健康が根本の原因をなして居た。先生は當時未だ五十八歳の若さであつたから、身體さへ强健ならば焼けた新聞社の再興位何でもない事であつた。唯、何分にも、それ以前から病み勝ちであつた。日本新聞社が焼けたのも、先生の病氣引籠り中に起つた出来事であつた。再起の爲めに無理をすれば、身體に重大な影響が起るかも知れない處から、遂に斷然決意して十年の牙城を棄てたのであつた。それ

位だから、其後先生の胸中には色々の計畫が描かれたけれ共、いつも不健康が妨げをして、それなりになつた。其爲め弊社の監修は意外に永く續いたのであつたが、我々としては、先生が監修の儘に、此世を去られたのは、本懐であつた。

## (三)

伊藤先生は、原稿の几帳面な人であつた。毎號定めの日にはキチンと書く。決して遅れるような事はなかつた。我々社會には珍らしい人だつた。我々は、筆持つ事を商賣にして居ながら、どうも原稿が几帳面に書けぬ。期日前には書きたくなし、期日になると、思ふほど筆が進まなかつたり、突然事故が起つたりして、失敬する。それは、獨り私ばかりではない。我々仲間の連中は大抵そうた。處が、伊藤先生になると、そう云ふことはない。毎月六の日になると、弊社の監修室へ來て、必ず原稿を書く。書き出すと、少しのことはりもなく、豫定の時間に書き上げる。丸で機械のようであつた。たま



に來ないことがあるが、それは病氣の時だ。然し、病氣でも必ず原稿は届けて寄越す。熱が出ても原稿は書くのである。少しでも體に障りがあるさ、原稿は書けないものだが、先生は三十八度位の熱が出て、平氣で書く。それ以上の熱でも、さうにかして書き上げる。先生は屢々病氣になつたが、原稿は決して怠らなかつた。弊社關係の十三年間に、病氣で原稿を書かなかつたのは、一二度しかなかつた。それも書けないのでなくて、書かさなかつたのだ。醫者さへ留めなければ、一度も休まなかつたであらう。

實に氣力の強い人であつた。それだから、年を老つても此點が衰へない。七十を越へても、此點は我々以上であつた。蓋し、先生の如く、老齡であつて、定期刊行物に連續執筆した人は、稀れであらう。其先生から、本年(昭和三年)の春の初めに、病氣で原稿が書けぬと云ふ傳言があつた。先生は鎌倉に住んで居るので、使をよこせぬ所から、知人に傳言したのである。我々は傳言を聞いてビツクリした。先生が病氣で原稿が書けぬなど、殆どない事だから、ビツクリせずには居られない。然し、

先生は何事も氣のよく廻はる人だから、我々が心配せぬよう、容體まで傳言して寄越した。曰く、神經痛が起つて手が動かせなくなつた。それで原稿が書けない。間もなくなほらうから、なほり次第書くと云ふのである。我々は、それで先づ安心した。然し、老齡の事だから、氣に懸る。それに奥様でも健康であれば、何でもないのであるが、奥様は永い病氣で、床に就いた儘なんだから、さぞ不自由たらうと思ふさ、痛ましいような氣にもなる。そこで、先生と特別親しみのある一木君を、我々一同の代表として見舞にやつた。歸つての報告も格別な事はなかつた。右の手がよく動かぬので不自由そうではあるが、元氣で、相變らずの氣焔だと云ふ事であつた。それで、我々は幾分安心の度を強めた。

そのうちに、一月が過ぎて、二月となつた。先生の病氣は依然としてなほらない。十一日が祭日休業であつたから、それを利用して、私は先生の處へ見舞旁々相談に行つた。

相談と云ふのは、先生の鎌倉引揚げである。先生が鎌倉へ引越したのは、何年であつたか忘れたが、震災の一二年前であつたから、モウ六七年になる。氣管が少々悪いからと云ふので、醫者の勸告で鎌

倉へ移轉したのであった。

最初は非常に鎌倉の氣候が氣に入つて、我々は幾度もなく、鎌倉の講釋をきかされた。

處が、鎌倉も慣れては氣候の特長を感じなくなり、東京往復の臆切のみ残る。先生も震災後は鎌倉が少々鼻についた模様であつた。いゝ家が見附かれは……云ふような意向を漏らすようになった。

が、それを實行しない前に、奥さんが病氣になつた。奥さんの病氣は「血拴」さか云ふ六つかしい病氣で、其症状は腦溢血と同じようである處から、動かす事が出来ない。それで、折角頭を持ち上げた先生の移轉説も暫く中止となり、奥さんの病氣恢復を待たねはならぬ事となつた。

奥さんは中々なほらない。一年経つても、二年経つても、なほらない。そうして居るうちに、先生が病氣になつたのである。

病氣になると、鎌倉は不自由である。殊に夫婦二人暮の處、二人共病氣になつたのだから、一層不自由である。私は先生が床に就いたと聞くさ、直様移轉の事が思ひ浮んだ。此事を先生の親友である

津田興二氏に話すと、氏も同感であつた。そして、氏は、家の方は、会社に貸家もある事ゆゑ、さうにか都合するからさまで云つて呉れた。

そこで、私は十一日の祭日に病氣見舞券々鎌倉引揚げの相談に行つたのである。

病室へ通つて見ると、成程先生は元氣だ。然し、不自由には餘程困却の模様である。此點は我々の察し通りであつた。

私が移轉の話を持ち出すと、先生は即座に應諾した。先生は、自分の事になると、ハキ／＼口を利かぬ人であつた。殊に、自分の一身上の事で、多少でも人に手数を掛ける事になると、馬鹿／＼しいほど遠慮をする人であつた。其人が私の持ち出した移轉説を即座に受入れたのだから、如何に鎌倉住居に閉口して居たかわかる。

移轉は勿論醫者が許せば云ふ條件附であつた。但し、是れは、先生自身の事でない。奥さんである。先生は其時元氣であつたから、自分の事など問題にしてない。俺は汽車でも行ける。家内は自動

車にせねはなるまい。それも静な自動車だ。静な自動車なら差支ないと思ふが、醫者に訊いて見なければならぬ。兎に角醫者に訊いた上の事云ふので、私は辭去した。

其時、三時間ばかり先生と話した。談話中に食事の時間が来て、お晝の御馳走になつた。食事の際先生は床の上に起き直り、私と差向ひで食べた。御馳走は、鎌倉で珍らしい、旨い天さんであつたが私は先生が病人でありながら、よく食べるのに驚いた。天さんを荒方一つ食べて仕舞つた。勿論、それは病氣が食べさせたので、其時の食事が、先生と私の食事の最後であつた。

(四)

私は鎌倉から歸ると、其翌日、高輪の自邸に津田興二氏を訪ふた。鎌倉行の結果を報告する爲めであつた事は云ふまでもない。津田氏は、先生の身邊を少なからず心配して居る人だから、移轉の意志が明瞭になつた事を聽いて、何か重大な希望でも達したように悦んで呉れた。實に頼母しい人である私は、斯る友人を持つ先生の幸福を思はず居られなかつた。

早速、津田氏と移轉先の相談をして見た。病氣療養だから無論郊外がよい。郊外となれば、幸ひ、津田氏の會社に年賦の貸家がある。少し狭いかも知れないが、狭まければ建て増してやる。氣に喰はなければ、新に建て、もやる云ふ事であつた。

誠に好都合である。然し、新に建てるとなるご、三四ヶ月掛るそうだから、間に合はない。兎に角一旦は今出来て居る家に引越し、それから尙ほ考へた方がよからう云ふような事で、其家を暫く賣らずに手許に保留して貰ふことを約して、津田氏の許を辭去した。これで、さうにか移轉先の見當は付いた。次ぎの問題は醫者の意見であるが、是れはそう急ぐ事はない。移轉云つても二月は駄目、三月になつても、央は過ぎの陽氣を待たねはならぬ事であるから、社用に追はれ勝ちの私は、其儘愚圖々として幾日かを過した。

すると、或日、堀田正由君の來訪を受けた。堀田君は、元日本新聞記者で、今は山一證券の重役、日本新聞には最後まで居残つた人だけに、先生との關係は、寧ろ私より深い。そこで、矢張り先生の

病氣を案じ、私の所へ相談に来て呉れたのである。

堀田君の相談も先生の移轉問題であつた。然し、其結論は同一でも、其之を必要とする原因は、我々より急迫して居た。堀田君の語る所に依ると、先生の病氣は、痛ましや不治の難症であつた。根本の治療法はないが、姑息の手當法はある。それは鎌倉では出来ない。病院へ這入るか、病院の近くへ移轉するか、しなければならぬ。一日を争ふほどでもないが、餘り氣永に構へても居られない。協力して適當な移轉先を捜そうではないかと云ふのであつた。

私は此話を聽いて、ビックリするよりも、寧ろ自分の迂遠を恥ぢた。如何に、我々は、素人にもせよ、先生が不治の難症に罹つて居るのを知らずに、持病の昂進や、單純なる神経痛と思つて居たのは餘りの愚かしさである。畢竟、本人からはかり病狀を聽いて居たからで、醫者の話も聽いたならば、こんな間違はなかつたらうと思はれて、自分の迂遠を恥ぢた次第であるが、堀田君は更に病氣の本體を知つた由來を詳細に話した。其概要は斯うである——。

先生は醫者嫌ひで有名になつて居る程の人だから、昨年末半身の痛みで、床に就くやうになつても名醫の診察を受けようとはしなかつた。處が、先生の甥に伊藤達三と云ふ人が居る。是れは、モウ相當の年輩で、三菱造船所の要部に居る人である。達三氏は一昨年父（先生の兄）を失つた。其經驗もある處から、先生の病氣を心配し、先生を無理に説き付けて、慶應醫科大學の内科学部長西野博士から診て貰ふ事にした。西野博士は久年先生を診た人である。そして、先生に鎌倉移轉を勧めた人である。其關係から博士に依頼したのであるが、第一回の診断は、格別の事もなかつた。肺が悪い事は悪いがそれは今始つた事ではない。先年診た時より何程も進んで居ない。靜に寝て居れば、聽て恢復するたうが、何分老齡だから、用心は飽くまで嚴重にせねばならぬと云ふことであつた。

此診断を聽いて、本人始め周囲の者は安心した。處が、先生の病氣は、中々、快方に向はない。向はないのみか、寧ろ段々悪くなつて行く。そして、痛い／＼と云つて居た右の胸がうつつり腫れ出して來た。附添の女中が惻かなものだから、此次第を達三氏に訴へた。それは……と云ふので、達三氏

は心配の度を高めたが、直ちに西野博士を煩はすのも恐縮たご云ふので、取敢えず千代田生命の大串博士から診て貰ふ事にした。

すると、其診断が大變だ。腫物は癌らしい。即ち肺癌だ。それに肺病も中々進んで居る。容易ならざる容體ご云ふ事であつた。

是れで、一同愕然として驚いた。然らば、今一度、西野博士の入念の診察を乞はうご云ふので再び同博士を煩はした。

博士も前診になかつた胸部の鈍隆を見て眉をひそめた。然し、癌は見なかつた。瘍たご断定したそれに膿が溜る。若ければ、外科手術で切り取つて仕舞ふのだが、年こつて居るから、それは出来ない。仕方がないから、針をさして膿を排出するより外ない。姑息の療法ではあるが、それでも患者は樂になつて、生命を長引かせ得る。但し、是れは外科醫の領分で、茲に至ると、自分の専門外になるご云ふ事であつた。

西野博士の再診は、私の鎌倉訪問の二三日後ちに行はれた。其跡へ堀田君が鎌倉を訪れ、更に達三氏を訪ふて此事實を知り、私の所へ相談に来て呉れたのである。

私は、堀田君に、移轉先に就て、津田氏との交渉顛末を話した。堀田君は、昔が昔だけに、此事も知つて居た。そして、津田氏の賣家には賛意を表して呉れたが、達三氏に別に意見のある事を話して歸つた。

其後、我々は屢々會合した。堀田君と私と達三氏と……別に檜崎景三君も加はつた。檜崎君は先生の所に書生をして居た人で、千代田に入社し、累進して神戸支店詰となつて居たのを、今回先生が病臥するや、會社で事情を察し、本社詰にして呉れたのである。

我々は相談の結果、津田氏の賣家をやめ、麴町土手三番町に相當廣い家を借りて、それへ引越す事にした。これは、主として達三氏の意見に基いたもので、慶大病院に近い事や、萬一の場合を想像したりなごして取極めたのである。

(五)

愈々三月二十五日に、先生は鎌倉から引越す事になった。

此日、東京から堀田君と我社の相澤周介君と私の三人が迎に行つた。自動車四臺を引卒して……自動車は一臺が寢臺車、他の三臺は普通車、寢臺車は先生用、奥さんはそれに及ぶまいと云ふので、普通車にした。勿論、動搖の少いのを選んだ。他の二臺は、我々附添用である。

私が、先生と移轉の相談をした時、先生は専ら奥さんを氣支つて居た。

然し、醫者に訊いて見ると、反對だ。奥さんは大丈夫だが、先生は氣を付けなければならぬと云ふのであつた。

そこで、我々は先生の乗物を寢臺式の自動車にしたのであるが、それも成る可く上等のものを選び其上、醫者から附添つて貰ふ事にした。附添の醫者は千代田生命に頼んだ。同社から會社醫を差向け

て貰ふ事にしたのである。

我々の自動車は八時に東京を出發し、十時半に鎌倉に到着した。汽車より一時間以上餘分に掛つた横濱市内が市區改正で迂餘曲折し、意外の時間が掛つた爲めである。橋崎君は前日から泊り込み、諸般の手配をして居た。達三氏は、據るなき社用の爲め、不參であつたが、其代りに、奥さんやら弟さんやらが、先着して居た。

一同簡単に晝飯を撮つて、イザ出發さなつた。勿論、其前に先生も、奥さんも一應醫者から診て貰つた。差支ないと云ふ事であつたので、我々は、先生を豫定の如く寢臺車に持ち込んだ。すると先生は御機嫌でない。

『己は副病人ぢや。本病人は向ふに居る。それをこれへ載せて呉れ。』  
と云ふのであつた。

先生は私が二月に訪問した時より眼はくぼみ、頬はこけ、音聲も力が抜けて、減切り衰弱が加はつ

て居た。それでも、氣力は相變らずである。一同、これには困つた。まさか、先生の方が重病とも云へぬので、大に當惑したが、幸ひ、楢崎君が先生の呼吸を呑み込んで居るので、何やら云つて體よく胡魔化し、我々の豫定通り、先生を寢臺車に載せて、それを先頭にし、次ぎを奥様、其の跡へ我々が附添ふて、自動車を走らせた、

自動車は行きより三十分多く掛り、鎌倉を出發してから三時間の後ちに、東京へ到着した。そして直に麴町土手三番町の借家に入った。先生も奥様も無事だった。

一同、ほつとした。殊に先生の悦びは非常なものであつた。

「是れは、實に立派なウチだ。宮殿だ。吾輩のような貧書生が斯かる宮殿に住へるのは、全く君達のお蔭だ。」

病床から、力をこめた聲で、斯う云つて、極めて満足の意を表した。

先生は、元來、喜怒哀樂を色に表はさない人だ。然し、此時ばかりは例外であつた。私は、永年先

生に師事をして居るが、先生が非常に悦んだ顔は、其時初めて見た。それと云ふのも、夫婦二人の癡生活が、よくよく淋しかったからであらう。そう思ふと、其悦びが痛ましくて、却て涙を誘はれた。

(六)

移轉は、體に障らなかつたが、病勢は東京へ引越してからも日々に募つた。

そこで、いつそ、入院しては……と云ふ事になつた。此事を、御氣に入りの達三氏が恐る／＼伺つて見ると、不思議や先生もその方がよいと云ふ。日にまし募る病勢に、流石剛腹の先生も我が折れて醫者と病院が慕はしくなつたものらしい。

慶大病院と打合せの上、先生は四月五日、西野内科の一等室へ入院した。お悦びの金殿玉樓に病臥する事、僅か十日に過ぎなかつたのである。

是れは、餘談だが、此金殿玉樓は、岩倉公の愛妾桃吉の住宅であつた事が後になつてわかつた。當時、稱して、桃吉御殿と云つたさか。そう云はれると、何處か小粹な所があるような氣がする。全體

の構造が御屋敷風の住宅でありながら……。此事がわかるご、

『ごうも叔父は妾宅に縁がありますナ。』

ご、達三氏が云つて、涙の席が笑ひ話になつた。日本新聞時代に住つた北品川の住宅もお鯉の住宅であつたさうである。

閑話休題。先生は病院へ這入つても、別に治療の道がなかつた。唯一つ、姑息の療法があつた。それは、脊中の腫れた所へ針を指して、膿を取るのである。そうすれば、病人は幾分か楽になり、壽命も幾らか延びるご云ふので、入院数日後、此の小手術が行はれた。外科部長の茂木博士がやつて呉れたのである。

先生は病氣の本體を知らないから、之を重要な手術ご心得た。自分が病院へ這入つたのも、主として此手術を受ける爲めご考へた。處がやつて貰つて見ると、少しも痛くない。推測力の發達した先生は、之を茂木國手の腕の冴にご考へた。其上、此小手術で痛みが薄らぎ、氣持がよくなつたものたか

ら、頗る御機嫌である。毎日、日課のようにして訪れる私の顔を見て、につこり笑ひながら、

『君、茂木の刀は斬れるよ。吾輩には何の感じもなかつた。冴いた腕でなくては能はぬ事ぢや。慶

大病院がこれだけの名醫を包蔵して居るからには、吾輩の努力も徒勞ぢやなかつたね。』

ご云つた。

先生は、慶大病院の創立者の一人である。初め理工科を立てる積りであつたのを、主として先生の意見で醫科に変更し、そして其創立に力を致した處から、斯う云ふのであつた。

然し、小手術の悦びも、束の間で、間もなく病勢は以前に優り、日々衰弱が加はつた。そして、嗜眠の傾向さへ生じて來た。我々は、絶望を感じた。そして、重大目の、餘り遠からぬうちに到來する事を覺悟せざるを得なかつた。

何さかしたくても、する事がない。慰めたくても、慰める方法がない。せめて、枕頭でも美しくしようご、花なご飾つた。



然し、先生は、相變らず、國家經濟を思つて居る。我々が枕頭を訪へば、脊中の痛みを無理に抑へながら、バツチリ眼を開け、

『經濟界はごうた。』

と訊くのである。それに對して、我々が答へる時は、眼は、はやごぢられる。病魔の誘ひに打ち勝つ事が出来ないのである。

斯う云ふ事が幾度も繰返された。先生は口を開けば、必ず經濟界を問ふ。曾て他の事を問ふた事になかつた。然も、其間も、病の高まるに連れて次第にうすれて行つた。

(七)

入院してから一週間目位であつたが、先生が未だひどく衰弱しない頃、我々は相談會を開いた。達三君と堀田君と檜崎君と私の四人である。

問題は、先生に病氣の本體を知らすか否かであつた。

先生は、此儘にして置けば、何病氣に掛つたかを知らずに、此世を去つて仕舞ふ。

それが、我々として、先生に對する本分を盡したものであるか、ごうか。

先生は、經濟論客としては、當代稀に見る達見の士である。不幸にして、先生の新聞經營は、失敗に終つたけれども、氣一世を蓋ひ、其の論説は天下を風靡した。それだけの方が、自己が如何なる病氣に罹つたかを知らずに此の世を去るのは、先生らしい最後ではない。然も、そうなるのは、知らない先生の不明でなくて、知らせない我々の不行届でないか、案ぜられる。

我々は、此事の可否を論議する爲めに、相談會を開いたのであつたが、相談の結果、思ひ切つて先生に打ち明ける事に一決した。そして、其の任には、肉身の達三君が當る事にした。

そこで、達三君は、其後幾度か、先生の枕頭に立つた。そして、先生に病氣の本體を打ち明けようとした。

處が、先生の顔を見ると、さうしても、云ひ出せない。如何に心を勵まして、云はれない。其結果、次へくこ連れ延べて居るうちに、先生の意識が衰へて、遂に知らしても、其効ひがなくなつて仕舞つた。

サア、斯うなると、我々は迷はざるを得ない。知らした方がよかつたのか、知らせない方がよかつたのか。

先生は、病院へ入院した當座は、未だ意氣が盛んであつた。

『己は今一度健康體にならねばならぬ。未だ遣り残した仕事がある。』

と、云ひくした。これを聽く度毎に、我々は斷腸の思ひがした。四人が相談會を開いたのも、これが爲めであつたのだが、先生は、其後衰弱が加はるに連れて、意氣が次第に衰へ、病氣の本體を知らずに死んでも、痛ましくないような氣がして來た。

イヤ、その方が却て自然であるように思はれて來た。

然し、斯かる場合、我々周囲の者は、如何なる態度を執ればよいものであるか。念の爲め、此事を北島博士に訊いて見た。

北島博士は、北島太一氏のことで、先生の見舞に來られた博士を捉へ、其意見を問ふたのである。すると、氏は、其答へとして、青山博士の話をして呉れた。

青山博士は癌で死んだ。博士が癌である事が明瞭になつた時、門下生は、合議の末、此事を先生に打ち明けた。

すると、博士は門下生に對して、其時の感想を語つた。

『己は、今まで、病人へ露骨に病名を告げた。然し、今自分がそれを實驗して見ると、病名は知らして貰はぬ方がよい。爾今君達は、病人へ病名を語つてはならぬ。それが醫道ぢや。』

と述べ、博士は之を以て門下生への遺言とした。

『斯う云ふ事があるのだから、君達が病名を明かさなかつたのは、却て其道を盡したものだ。』

と云ふ事であつた。

我々は、此の説を聽いて漸く安堵した。

## (八)

入院して十日目位に、榮養注射が行はれた。醫療の力は恐ろしいもので、これで先生はスツカリ元氣を恢復した。久し振りにニコやかな顔をして、世間嘶さへした。我々は其顔を見て、近世醫學の威力に感謝しながらも、人工榮養を施さねばならぬほど進行した先生の病體を悲んだ。然も、注射の効能は其日一日だけたつた。翌日になると、又元の衰弱に歸つた。中一日をいて、又、榮養注射が行はれた。其時は、最初の日ほど元氣が恢復しなかつた。それから度々同じ事が繰り返されたが、元氣恢復の度は一回毎に衰へ、遂には其効能を認め得ないようになつた。

榮養注射が行はれ出してから、一同、最後の日の近いことを覺悟した。そこで、病室も特等に換へ

られた。一等では周囲の者が詰め掛けて居るにも、見舞客を受けるにも、手狭であつたからだ。

慶應病院の一等と云ふのは、普通病院の特等に値する廣さだが、それだけに特等とすると、素敵なものだ。病室の次ぎに應接間が二つも附いて居り、家族と看護婦の寢室は申すに及ばず、便所に臺所が附いて居つて、浴室の設備までがしてある。なんの事はない、病院の中へ獨立した一軒を建てたようなものだ。其一軒も貧弱な一軒ではなく、安く踏んでも、輕井澤の別荘位に値するものだ。

無論、入院料も安くない。然し、先生の最後たご云ふので、達三氏が一議に及ばず之に取極めて仕舞つたのである。

特等室へ移つてからの先生は、ウツラ／＼と眠るばかりであつた。然し、そうなつても、敏感の先生は、其處が普通の病室でない事を知つた。

『ここはホテルかい。』

と、付き添いの看護婦に訊いたさか。

そう云ふ間も、聽て出なくなつて、はては意識さへ朦朧になつた。衰弱が極度に達したのである。醫者から榮養注射を繼續するか否かの問ひがあつた。合議の結果、中止して貰ふ事にした。其譯は、既に意識が有るか無しかの状態となつては、生きても無意味だ。本人の厭がる注射をして、人工的に無意味の生を延長するのは、先生らしい最後でない云ふので、注射の繼續を斷はつたのである。

それは、四月の廿八日であつた。此日、我々も、何さなく最後のよ様な氣がした。それで、朝から病院へ詰め掛けて居た。其處へ注射の相談があつたものだから、愈々駄目と觀念した。

午後一時頃、枕頭の看護婦から、隣室の我々へ、容體險惡の知らせがあつた。それ！云ふので、一同病床を圍繞した。主治醫は強心劑の注射をした。それで又持ち直した。

然し、それも只數時間の命脈だつた。カーテンを漏るゝ春の日が暮れると、容體は、再び險惡となつた。こゝに至れば、諦めるより外ない。

甥の達三氏が先づ先生の唇を濡めし、最後の告別をした。次いで養家の遺子隆太郎氏が之に倣つた

以下交るゝ、悲痛を抑ひて、先生と最後の告別をした。

午後七時四十五分、脈を診て居た主治醫は先生の手を放した。そして、一應瞳孔を檢した後ち、靜に一禮し去つた。

あはれ、先生は七十二歳を一期として、此世を去つたのであつた。其夜、遺骸を麴町の自宅に移し、嚴に葬儀が営まれた。

## 通信發行

### (一)

話は前へ戻つて大正四年となる。大正四年は、前半は不景氣であつたが、後半は景氣づいて來た。それは、云ふまでもなく、我經濟界が歐洲戰爭の好影響を受け出したからで、前途大景氣來の兆候が

歴然として居た。

好機は来た。正に千載一遇の好機は来た。我々は此好機を逸してはならぬ。我々が經濟雜誌を刊行した本來の使命を果たしつゝ、社礎を固めるのは、此秋だ。我々は大に活躍せねばならぬ。と考へた結果、我々は先づ皆川君の臺灣行を決行する事にした。

臺灣行は、即ち臺灣の糖業視察である。歐洲戦争と臺灣の糖業視察との關係があるか云へば、當時、戦時需要で、活躍し出した商品が色々あつた中でも、砂糖は重要な其一つであつた。即ち糖價は暴騰しそうである。現に既に暴騰して居るが、前途益々其度が加はりそうである。是から砂糖會社の暴利時代が来る。同時に砂糖株の活躍時代が来る。我々は其事を事前に豫測し、機敏に讀者へ報道せねばならぬ。そうするには、決算報告の觀察と會社當局者の談話だけでは駄目だ。須らく臺灣へ行つて、糖業の本體を究めて來なければならぬ、と云ふので、戦時活躍の第一歩として、皆川君の臺灣行きを決行する事にしたのであつた。處が、それに就て困つたのは、旅費だ。大正四年の下半期は

雜誌の賣行が増加した上、『決算報告の見方』の出版が當つたりなごして、懐合は幾らか楽になつて居たが、それでも臺灣行の旅費をスラ／＼と出し得るようにはなつて居なかつた。

サア、之をどうするか。是れには少なからず頭を痛めた。

當時、我々のような小雜誌は、皆な製糖會社から旅費を貰つたものだ。そして、其上、御馳走にまなつたものだ。然も、肝腎の視察は一向にやらない。視察と云ふ名目で、旅費を貰つたり、御馳走になつたりする輩が多かつたものだから、我々小雜誌の臺灣糖業視察は非常な不評判であつた。

正直に云ふと、我々も旅費だけは製糖會社から貰ひたかつたのだ。然し、貰ふと、今までの輩と同じに見られる。それが癪だ。さりごと、自力で臺灣を視察する力はない。思案の末、大事の前の小事だから、恥を忍んで、製糖會社の援助を仰がう。其代り、御馳走は如何なる場合でも絶體に辭退するとして、眞面目に糖業視察をやり、質素儉約を旨として、最少限度の經費に止めたならば、記者たる體面を保ち得ないところもあるまい。と云ふ風に考へて、此事を皆川君に注文し、僅かの旅費を懐にし

て臺灣へ發足して貰つた。

皆川君は此難役を快よく引受けて臺灣へ向つた。

それは大正四年の十月で、當時、皆川君は廿六歳の青年であつた。砂糖に關して何等の知識もない白面の青年が、單身孤影、臺灣の糖業視察に行く事だけでも、大膽な計畫であるのに、其上、向ふへ渡つて旅費まで稼がねはならぬのだから、到底尋常一様の視察ではなかつた。それを遣らせる、こつちもこつちであれば、それを引受ける皆川君も皆川君であつた。其處に、創業の若さがあつた譯である。皆川君が臺灣出發の後、戦時景氣の色彩は益々濃厚になつた。そして、我々の雑誌が大に歡迎されるようになった。

大正四年が暮れて、大正五年の新年を迎へると、私は、新機運に乗じた一つの新計畫を樹てた。それは、ダイヤモンド通信とする會社事情の特報を發行する事である。

(二)

經濟界が活躍して來ると、月一回の雑誌では報道がおそくなる。之を二回三回にする必要がある。然し、當時の我々では、其力がなかつた。そこで、私は一つの便法を案出した。それが即ちダイヤモンド通信である。

ダイヤモンド通信と云ふのは、我々が調査した會社事情を謄寫版にし、一週間に一度會員へ報告するのである。斯くすれば、會社事情の變化を早く知りたい人は、此通信に加入して貰ひ、おそくてもよい人は、雑誌で間に合はして貰ふ。私は斯う考へたのである。之れを實行すれば、月刊雑誌の缺陷が補へる。同時に、我々も金儲けになる。金儲けと云ふと、いやしく聞ゆるが、私は雑誌經營上、之を重大條件にしてゐる。

今の世には、新聞雑誌が數限りなくある。然し、そのうちに、言論の獨立を保つて居るのは、どれ

だけあるか。彼等は、表面、不羈獨立であるかの如く装つて居る。然し、一度勝手元へ廻つて見ると表裏の差の著しきに驚かざるを得ない。それと云ふのは、畢竟、會計が確りして居ないからた。收支が合はないから、無理な援助を求める。それが腐れ縁となつて、獨立の筆が振へなくなる。是が今の新聞雑誌の實情である。實に情けない次第だが、事實だから是非もない。我々も、過去三年間、收支の合はないのに苦んだ。然し、其の收支不足は、至つて僅少であつた爲め、我々を理解して呉れる先輩の援助で足りた。我々は、他の援助を得ながらも、言論の獨立を傷けずにやつて來たのであつた。然し、斯う云ふことは、何時迄も續くものでない。又、續けるべきものでもない。私は一意専心、會計の獨立を心掛けた。幸ひに、歐洲戦争が起つて、其機運が廻つて來た。私は、此機運に乗じ、豫ねての宿志を達する爲めに、ダイヤモンド通信を計畫したのであつた。

だが、それに附けても、不便なのは、事務所の所在地である。ビヂネス・センターに遠ざかつて居る赤坂では、機敏な活躍が出来ない。折よく、懷都合もよくなつて、移轉に堪ゆる状態となつたので、兜町蠣殻町方面に適當の事務所を設ける爲めに、それを捜しに出掛けた。

最初兜町方面を捜したが無い。轉じて、蠣殻町方面を捜した。そうしたら、表通りに一軒、恰好なのが見つかった。三階である。一軒を三つに割つた一つの三階ではあるが、間口が四間からあつて、堂々として居る。それだけに、家賃は高いと想像した。家主を尋ねて、恐る々々訊いて見ると、意外に安い。たつた三十五圓であつた。我々は天の賜物と悦んだ。だが、人間と云ふものは妙なもので、餘りに好過ぎる裏を考へる。なぜこんなに安いんだらう。こんなに安い所がどうして空いて居るんだらうと云ふ疑問が起る。近所に知合があつたから訊いて見た。すると、直ぐ其原因が分つた。

其家は、三四ヶ月前まで洋食屋が借りて居た。處が、其洋食屋は一向にはやらない。遂に、經營難に堪へ兼ねて夜逃げをした。其跡は縁起が悪いと云ふので、誰も借り手がない。場所が場所だから、普通なら十日と空いて居ない家だが、右の關係で二三ヶ月も寒さがらない。其處で家主は、家賃を五圓下げた。四十圓であつたのを三十五圓にしたのだと云ふ事であつた。

これで、委細の事情が判明した。我々は元より縁起など問ふ處でない。場所のいゝのこ、家賃の安いのを喜んで、早速其家を借りた。

(三)

借りた家に多少の造作を加へ、大正五年の二月下旬に蠣殻町へ移轉した。其處へ、折よく、皆川君が臺灣から歸つて來た。手筈は上々である。皆川君の臺灣土産を第一回の通信に出せば、大に受けると思ふと、同君の歸京がひさしほ嬉しく、東京へ歸着する其夜は、一同勢揃ひをして東京驛へ迎々に出た。一同と云つても、當時の同勢は四五人だったが、そのうちには、池田藤四郎氏も加はつて呉れた。汽車は定刻に東京驛へ着いた。皆川君は直ぐ車から出て來た。四ヶ月別れて居た我々に與へた第一の印象は、恐ろしく顔色が黒くなつて歸つて來た事であつた。それが夜目にもハッキリわかる。そこで、普通たつたら、口の滅らない連中はかりたから、

『オイ、君、馬鹿に黒くなつたぢやないか。』

『日本人とは見ぬんね。』

なごさ飛ばし、挨拶よりも、じやう談を先きにする處だが、出て來た皆川君は甚しく興奮して居つて仲々以てじやう談どころの沙汰ではない。

ごうした事かご訊いて見ると、カバンが無くなつたご云ふ。然も、其カバンは、衣類や手廻道具を入れたものでない、大事な／＼臺灣視察の書類を入れたものだ。それが無くなつたのだから、正しく一大事だ。皆川君が興奮するのも無理はない。

然し、我々は、如何に一大事でも、其場合、突嗟の間に、何の智慧分別も出なかつたから、いゝ加減の氣休めを云つて、其夜は、長途の勞をねぎらひ、それなり別れた。翌日、出社して尙ほよく訊いて見ると、皆川君は、本来ならば、其朝、東京へ着くべきであつた。大阪からは其都合で汽車に乗つた。處が、汽車が京都を出ると、自分のカバンが無くなつて居るのに、氣が付いた。その時、車中は



非常に込み合つて居たから、他人の所へ紛れ込んだのでないかと、ボーイに命じて車中を隈なく捜させたが、無い。無いとすれば、客が間違へて持つて降りたか、盗まれたかしたのである。

大方、盗まれたのであらう。然し、間違へて持つて降りたのでないとも限らぬ。そうすれば、其人は驛へ届出るに相違ない。届出れば、其カバンは自分の手へ戻つて来るから、早速其旨乗客専務に話し、京都驛へ長文の電報を打つて貰つた。そして、其返事を待つた。處が、汽車が、米原へ着いても大垣へ着いても、返事が来ない。他の乗客は皆眠つて居る。皆川君獨りバツチリ眼を開いて只管電報の返事を待つたが、遂に來なかつた。そこで、名古屋で降りて、京都へ引返し、カバンを捜しに行つた。矢張り無い。仕方がないから、其旨を七條警察署へ届出、午前九時の急行に乗つて東京へ歸つた。と云ふのであつた。

實は、我々も、最初朝歸ると云ふ電報を受け、それが夜に延びたのを不審に思つて居た。カバンの一件を聽いて、歸京遅延の事情は判明したが、大切な材料がなくなつて、あたら視察が煙になるのが

ひどく懸念された。

皆川君は、其夜一睡もしなかつた。翌日の汽車にも眠れなかつた。東京へ着いた其夜も碌々眠れず翌日になるこ、役所の出勤時間を待ち兼ねて鐵道院を訪れた。運輸局長にカバンの詮索を依頼する爲めであつたのである。其時の運輸局長は木下氏で、氏は大に皆川君の立場に同情し、極力詮索する事を引受けて呉れたと云つて、皆川君は幾分機嫌を直して歸つて來た。

(四)

翌日になるこ、東京驛から皆川君の所へ電報が來た。『カバンアツタ』と云ふ知らせである。皆川君は雀躍して嬉んだ。早速、東京驛へ駆け付け、間もなく一箇のカバンを持ち歸つた。然し、それは、皆川君が京都驛でなくしたカバンではなかつた。カバンは丸で違つたものであつたが、中味は全部皆川君の視察書類であつた。皆川君は當時の紀行文に此顛末を次の如く書いて居る。

——掛員の部屋に入ると、其處に五六人の驛員が一箇のカバンを取巻いて何か協議をして居る所だつた。自分は眼早くカバンを見た。そうしたら、意外にも其カバンは、自分が思ひ焦れて居るカバンさには似つかぬ物だつた。其瞬間自分は再び深い失望に陥つて了つた。驛員は言つた。

『カバンは出ました。其れは之れです。』

『それは……。』

と、自分が言はうするのを遮つて、驛員は又言つた。

『いや、カバン其物は全く貴方の御申出の物とは違つて居ます。然し中の物は正しく貴下の探ねて居られる書類に相違ありません。あらためて見て下さい。』

言はるゝ儘に、其のカバンを引寄せ、開けて見ると、正しく自分が求めて居る書類であつた。然もそれが殆ど一物も紛失した様子もなく入つて居る。自分は始めて甦つたやうな氣がした。それにしても奇怪至極なのは、此のカバンである。さうしてこんな物の中に自分の書類が入つたのならう。それ

が又東京ステーションに發見されたこと云ふことも不思議だ。然し、私が糺して見るまでもなく、驛員は斯う説明して呉れた。

『實は、昨夜の急行列車に、東洋製氷會社の尾上といふ工務課長が乗つた。此の人は、寢臺を取つて一箇のカバンを其の側に置いて寝たのです。處が、翌朝起きて見ると、カバンが全くスリ替へられて居る。開けて見ると、本のようなものはかり入つて居る。驚いて列車の専務から調べて貰ふと、さうも泥棒がカバンをスリ替へて、何處かの驛へ降りたものらしい。然し、それが何處で行はれたかサツパリ見當が付きません。兎に角、此カバンは東京驛の驛長室へ提出されました。貴下の御覽になつて居るのが即ち其れです。』

尾上氏がカバンをスリ替へられたのはそれで分つたが、分らぬのは自分の書類が其カバンに入つた事である。之に對する驛員の想像は斯うであつた。

『先夜、記者のカバンを盗んだ泥棒は、開けて見て、内容の意外なのに驚き、更に之を利用して又一

ト仕事しようご考へた。同時に又記者を氣の毒に思ひ、返してやらうご云ふ心にもなつた。然し、盗んだ儘のカバンでは、未だ目が経たないから、驛員や掛員に氣付かれる虞れがあるので、曾つて同じ方法で盗んだカバンに中味を入れ替へ普通の旅客に装ふて列車に持ち込み、似寄りのカバンを物色し、尾上氏の分ミスリ替へたものらしい。此分たご、餘程老練な仕事師が、列車内に跋扈して居るご見えます。手を盡して捉まへねはなりません。』

それにしても、一體、誰のカバンが身代りになつたものたらう。カバンを詮索して見たら一枚の名刺が出た。見るご之は又意外、それは自分が今回の視察で懇意になつた臺灣製糖會社の三坂店製糖所長長金木善三郎氏であつた。事實は小説より奇なりである。——

(五)

カバンに關する皆川君の紀行文は前回で終つて居るが、此物語はまだ盡きない。肝腎の泥棒に就て後日物語がある。

カバンを手に入れてから一ヶ月はかり經つご、大阪朝日の高原氏から皆川君の許へ一葉の切抜を送つて來た。見るご其見出しに『箱師捕はる』ごある。皆川君はそれで直ぐ『きやつ捉まつたナ』ご察した。讀むご、其泥棒は堺の坊主であつた。寺では喰へないので、汽車稼ぎを始めた。色々やつて居るうちに、悪運盡きて捕はれたのだが、被害者は却々多かつた。皆川君も其一人として書いてあつたので、高原氏が眼早く見つけ、切り抜いて送つて呉れたのであつた。

これで視察書類を返して寄越した次第がわかつた。泥棒に落ちぶれても、坊主は坊主だけの事があるご云ふ事になつた。

閑話休題。皆川君の視察書類が無事たつたので、豫定通り、大正五年三月の第一土曜に、第一回の通信發行に取り掛つた。簡單の仕事なだけれご、初めてだから其騒ぎが大變たつた。

其時の事は、今でもよく憶ひて居るが、土曜日の夕方から私が通信文を書き出し、幾らも進まぬ處へ伊藤先生が見えた。移轉した新事務所を見に来たらしいのだが、先生の事だから、そんな事はおくびにも出さず、我々の額を見るま直ぐ時局の經濟談をやり出した。

無論、面白い。そして、爲めにもなる。同人一同、グルリと先生を取り巻いて、謹聽した。

處が、先生の經濟談は例に依つて長い。場合が場合だから、それに少々困つた。然し、時刻が丁度夕飯時だから、聽て歸へるたらうと思つて居ると、先生は却々動かない。そのうちに時計は七時過ぎ、八時となつた。サア、斯うなつては、先生の夕飯に對して無用意で居る譯に行かない。近所の洋食屋から洋食を取つて出すと、先生はそれを無造作に食つて、又經濟談を續けるのであつた。腹は出來たし、アルコールも少々這入つて居るから、氣焰は更に高い。

困つた。實に困つた。相手が先生だから、失禮をするま云ふ譯にも行かず、通信文を氣に懸けながら、ジツと辛抱しての氣焰拜聽には、少なからず困つた。先生は、こつちの事情を知らないから、そ

れからそれへは經濟談を續け、心行くまでに論じ盡して、漸く腰を上げた時は、勿驚、十一時を過ぎ居た。先生は六七時間談じ續けたのである。

先生が歸へると、私は、急ぎ、通信文の續きを書き出した。處が、氣はかり焦つて、思ふように進まない。半びらの原稿用紙を二三十枚書くのに、五六時間も掛り、書き終つた時は夜が明けた。書いた通信文は、片端から謄寫版にするのだが、是が亦難澁であつた。第一に鐵筆が旨く使へない。第二にロールの轉ろがし方が緩急よろしきを得ない。社員一同、車掛りの陣形で、車輪に立ち廻はりながら、僅かの謄寫版が旨く刷れず、大まごつきにまごつて、翌日の十二時過ぎに至り、漸く刷り終つた。それを疊んで封筒に入れ、發送を終つた時は、二時近くであつた。無論、徹夜したのだ。誰も一睡もしなかつたのだ。一切終つて一ト息した時は暫し放心の體であつた。

幸ひに、第一回の通信は、材料が珍らしいま云ふので、大受けであつた。然し、今から考へると、當時は幼稚なものであつた。各社の産糖豫想を基礎にして、簡單の成績豫想を書いたのだが、それが

大に受けたのである。

(六)

通信を始めるに就て、私の頭を悩ました問題は、されたけ申込があるか、と云ふ事であつた。多ければ問題はないが、少いこやめねはならぬ。折角やり出してやめるこなるこ、體面にかゝはる是が心配であつた。

私は、元來、氣の小さい男だから、成功よりも失敗のみを慮る。そこで、出来るだけ申込を多くする爲めに、料金を安くした。料金は一ヶ月三圓にした。一ヶ月五圓でもよいように思ひながら、三圓にしたのであつた。發行は一週一度である。

當時は今日より何事も桁の低い時代ではあつたが、戦時經濟の時報で、一ヶ月三圓は安からう。これならば、相當の申込があるに相違ない。然も、一ヶ月百人の會員があれば、維持して行ける。それ

以上あれば儲かる。如何に我々が微力でも、時が時で、時に應じての計畫だから、それ位の申込はありそうなものたこ考へた。そこで、愈々之をやる事に決心し、其旨誌上に廣告した處、申込は意外に多かつた。即ち雑誌が出るこ間もなく、百名以上の申込があり、愈々通信を發行する時には、三百名以上に上つた。それだけ謄寫版の印刷が多くなり、まごつきの度を増したのであつたが、第一回の失敗に懲り、第二回の謄寫版は手順よく運んだ。

先づ第一に専門の鐵筆書きを雇入れた。第一回の鐵筆書きは、高岡秀雄君がやつた。是れは、無論鐵筆なごに經驗がない。比較的字が旨いと云ふだけで、やつて貰つたのだ。我々同人は、毎日々々字を書く事を仕事にしてゐながら、旨く書けるものがない。是れは、獨り、我社に限つた事でなく、何處の新聞雜誌社へ行つてもそうだが、多年、原稿を書いて居るこ、一種妙な筆癖が出来、到底、人前へ出し得るような字が書けない。そのうちにも、高岡君が稍々體をなして居るこ云ふので、同君を選んだのであるが、同君は鐵筆に經驗がないから、少し書くこ直ぐ疲れる。そこで、餘儀なく佐田君が

代つたが、これも旨く行かなかつた。と云つても、外に代りがないので、兩君が交互に書いたが、書體が不揃で、夥しく不體裁なものになつた。そして、時間が篋棒に掛つた。是では到底いけないから取急ぎ新聞に廣告して、専門の鐵筆書きを雇入れたのであつたが、それが今日迄も健全に在社して居る富塚知恥男君である。次に、謄寫器を取り替へた。初め、ロールを轉ろがす普通の謄寫器を買入れた。能率が非常に悪い、インキだらけになつて、一日刷つても何程も刷り上らない。詮索の結果、グル／＼廻はして刷れる輪轉機のあることを知つた。處が、それはロネオと云ふ舶來機械で、値段が素敵に高い。當時の我々では、到底買へそうもない。次ぎの物を搜した處、日本出來が見附かつた。これは、構造がお粗末だけに、舶來の何分の一かであつた。それでも五六十圓もするので、却々耐いたが、大奮發で買つた。此機械は、廻轉がギョチなくて、人力で紙を差入れねばならぬ缺點はあつたが、少し馴れると、旨くやれるようになり、一時間に千枚も刷れ、大能率を發揮した。これで謄寫版の方も旨く行くようになった。

謄寫版が刷り上ると、私始め記者も給仕も事務員も一緒になり、社中總係りで、發送をするのであつた。馴れぬ仕事で、初めはまゝ、事じみて居たが、段々馴れて旨くなつた。皆川君などは職工洗足の腕前を示したものだ。

## (七)

皆川君は、一名六尺居士と云ふ。身長が六尺に垂んとして居るからだ。それだけに手も長い。此手の長い事が通信の發送作業に非常に役立つた。

通信の、一回の量は、半紙十枚内外であつた。私が、通信文を書く、富塚君が原紙に寫す、給仕が刷る。發送と云ふ順序であつたが、發送の場合に、刷り上つた半紙を、稍々彎曲させて、ズラリと並べる。それを一枚々取つて、十枚ばかり重ね、綴つて發送するのだが、半紙の行列が長いから、手の長い人でないさ旨く取れない。之を皆川君が得意でやつたのである。

皆川君は、餘り器用な男でない。舉止優雅、辯舌さわやかにして人ご人ごの應對は巧みであるが、手先に至つては、極めてブキツチャウな男だ。それだから、半紙の重ね作業も、初めは滑かに行かなかつた。然し、熟練云ふものは恐ろしいもので、回を重ねるに従つて皆川君の手先は敏捷になり、遂には機械も及ばぬ位になつて仕舞つた。

毎週土曜日の夕方になると、皆川君が、高く積んだ、幾つもの、謄寫版刷を前にして腰を据ゑる。それをグルリと取り圍んで、一同がそれ／＼の部署に着く。皆川君が千手觀音のような働きを始め出すと、次ぎ／＼の手が動く。斯くして通信が發送されるのであつた。發送の場所が又振つて居た。

鷹殻町の事務所は三階で、一階が事務室、二階が應接間、三階が編輯室であつた。事務室の次ぎに小さな日本間があつた。此日本間は、食堂であり、勝手の婆の寢室であり、便所の通路であつた。發送は、此日本間で行はれたのだ。

事務室で謄寫版を刷つて、日本間へ並べる。日本間は三疊に過ぎないのだから、謄寫版刷と皆川君

とで荒方一はいになる。それへ無理に割り込んで、緩りや、折り疊みや、狀袋入をやる。イヤ、大變な騒ぎであつた。全く、おもちや箱をひつくり返したやうな光景であつた。然し、常人達になつて見ると、狭い所で、ゴチャ／＼仕事をするのも、味のあるもので、お互ひに、戯談を云ひながら、發送をするのが、一つの樂みであつた。そして、それで、親密の度合が一層増した。

處が、それに一つ困つた作業があつた。それは、我々がガチャンと名づけるものであつた。ガチャンとは、作業の音響を云つたもので、通信を綴る時、小さな器械へ半紙を挟んで、上から叩くと、ガチャンと云ふ、其音響を作業の名にしたのである。

此ガチャンがやれそうであつて、やれない。一つ二つは何でもないが、連続して何百回に及ぶと、手の掌が痛くなる。佐田君が初め得意でやり、中頃に至つて往生し、翌日になると、手の掌が腫れ上つて、泣いた。當時、我々同人の中で、最も我武者であつた佐田君にして是れたから、他は推して知るべしで、これには適任者を得られなく、少時に交代してグル／＼廻にした。何にしる萬年筆より重

い物を持った事のない連中だから、力仕事さなるこ、閉口するのであつた。

通信は會員組織にしたが、一回毎に會員の數が増した。そして、一週一回ではマガルイと云ふ要求がはげしかつたので、間もなく一週二回にした。そして料金を七圓に値上げした。それでも會員の數は大に殖ゆ、最高七八百に達した。是れは、ダイヤモンドの米櫃とも云ふべきもので、我社の基礎は之に依つて固められたのである。

## 體裁變更

### (一)

私の回顧録も年越になつた。書き出す時は、一年で終はる積りであつたが、途中で休んだり、書き過ぎたりした爲めに、こんな次第になつた。實は、昨年一はいで打ち切らうかと思つたが、未だ書き

残した事が澤山あるので、引續き書く事にした。面白くもなからうが、私は、之に依つて、本誌經營の告白をしたいのだから、讀んで頂きたい。

弊誌は創刊以來、屢々體裁を變更した。最初は菊判、六號活字三段組み。次は九ポイント二段組みそれからグツミ形を變へて菊二倍判とし、それを更に四六二倍判に引直した。此形は今日迄引續き用ゐてゐるが、中の活字は三回變へた。即ち最初は九ポイント、次は八ポイント半、間もなくそれを更に八ポイントに變へた。現在の活字がそれである。我々はナゼ斯様に屢々體裁を變更したか。今回は其理由を語りたい。

私は、元來、雑誌の製作に就いて、一つの理想を持つて居た。それは出来るだけ雑誌を安く作るご云ふ事だ。

今もそうだが、弊誌の創刊當時は、特に、世上の雑誌が製本費を掛け過ぎて居た。私は、是が氣に喰はなかつた。ナゼ、モット、製本費を安くしないのたらう。是れでは編輯費を何程も掛けられない



例へば、茲に、定價二十錢の雑誌があるとする。(今日では定價二十錢の雑誌は殆どないが、當時は大概此程度のものであつた。)斯う云ふ雑誌は十錢位迄製本費を掛ける。本屋へは、無論、定價通りに卸せない。本屋の卸値は、定價の七半か、八掛である。即ち、定價二十錢の雑誌が十五錢にしかならないのだ。製本費も僅か五六錢の差である。是れだけでも、それが丸取になるならば、またよいが、此上返品の損失を負擔しなければならぬ。雑誌社と本屋との取引は、普通の賣買關係ではない。委託販賣である。だから、賣れ残つた雑誌はドシ／＼返される。此損失が少くない。どんな堅い雑誌でも一割の返品がある。大概一割五分から二割ある。多いのになると、三割にも四割にも達する。假に、一割五分の返品があるとする。此損失を製本費に加算すると、十錢の原價が十一二錢になる。即ち一部の差益が三四錢しかなくなる。一萬部賣つても三四百圓の差益に過ぎない。外に、廣告収入があるが、これは廣告支出に打ち消される。イヤ、廣告収入が廣告支出を償ひ得るのは、よい方で、大抵、出超過になる。なればそれだけ賣上差益が少くなる。斯くして、少い編輯費が益々少くなる。

編輯費が少いと、雑誌は餘なものが出来ない。のみならず、そう云ふ雑誌は腐敗する虞がある。雑誌記者たゞて霞を食つて生きて居る譯に行かないのだから、或程度まで生活費が掛る。それを得られないと無理をする。無理をすると思ふ事が書けなくなる。そして、遂に、初の趣意は何處へか消れて何の爲めに雑誌を發行したのやら、譯が分らなくなる。

私は、それが厭たつた。そこで、出来るだけ雑誌を安く作り、それを高く賣つて、編輯費を豊かにし、記事を精選したい考へを持つて居た。是が私の理想であつたのだ。然し、斯かる理想は初めから行ふ譯に行かない。雑誌なんぞ云ふものは、厭なら、只やつても讀まないものだから、初めから高く賣る譯に行かぬ。私は、初めは半は贈呈の意味で、定價を僅か十錢にした。そして、窃に値上の機會を待つた。處が、其機會が二年目に來た。

## (II)

本誌は、それまで餘り例のなかつた會社評論を特色としたものだから、發刊早々一部の人には認められた。然し、それは、ホンの一部であつた。大多數は本誌の存在を知らなかつた。そこで、久し振りに友達などに出遇ふと、

『君は今何をして居るんだ。』

『雜誌をやつて居る。』

『何ぞ云ふ雜誌だ。』

『ダイヤモンド云ふ雜誌だ。』

と答へると、忽ち彼は、

『フーン。』

と、鼻で笑つて、

『齒磨の廣告みたいな雜誌だな。』

と、嘲弄する。それが一人や二人の事ではない。十人が十人皆なそう云ふ。それも單に友達だけなら未だしも、初對面の人までがそう云つて笑ふ。ダイヤモンド云ふ名が餘程滑稽にきこゆるものらしい。

こつちは元より腹が立つ。悪い氣で云ふのでない事がわかつて居ても、命がけでやつて居る雜誌を鼻で笑はれるのだから、腹が立つ。本來ならば、

『イヤ、齒磨きの廣告雜誌ではない。經濟雜誌だ。』

と云つて、辯解したいのだけれども、嘲笑が癢に障つて居るから、其人とそれ以上口をきく氣がしない。フーツと膨れて、それなり別れて仕舞ふのが例であつた。

私は、池田氏からダイヤモンド云ふ名をきかされて、非常にいゝ名と思つて雜誌に附けたが、餘り冷やかされるので、いやになつた。そして、同じ名の先輩にダイヤモンド齒磨のある事を怨めしく思つた。と云つても、一旦、斯うな名乗つて乗出した以上、名前變へをする譯にも行かないので、ジ

ツと辛抱してやつて居るうちに、歐洲戦争が起り、雑誌の賣行が増して來た。私は其機會を利用して大正四年の七月に定價を二十錢に引上げた。本誌を創刊してから二年二月目であつた。

然し、此時の値上げは小手調べとも云ふ可きものだつた。私の理想は紙數を増さないで、値上げをするのであるが、此時の値上げは紙數を増して値上げをしたのだから、普通月並の値上げであつた。それでも、發刊してから約二ケ年、一部も發行部數の増さなかつた弊誌が、兎に角、賣行が増加して紙數を増したり、値上げをしたりする事が出来るようになったのだから、我々としては、所謂劃時代的の進歩であつた。

それから、八ヶ月後の大正五年三月に又値上げをした。此時も紙數を増した月並の値上げであつた處が、戦時景氣が日に増し高まつて行く時代だから、幾ら値上げをしてもこたはない。讀者はそれより内容豊富を歓迎するのであつた。そこで、愈々我々の理想を實行する事にした。即ち紙數を増さない値上げを實行したのである。

紙數が増さない値上げと云ふと、如何にも横着に聞ゆるが、我々の趣旨はそう云ふ點から出發したのではない。前にも言つた通り、世上の雑誌は形式に囚はれ過ぎて居る。即ち外觀に金を掛け過ぎて内容を粗略にして居る。我々は是れを反對の行き方をしたのであつた。言ひ換へれば、外觀がよくなくとも、内容をよくしたのであつた。そうするには、出来るだけ紙數を少くしなければならぬ。と云つて、只紙數を少くしたのでは、記事の數が少くなつていけない。記事の數を少くしない紙數の減少である。是が我々の理想の造り方であつたのだ。

## (三)

本誌は、最初、菊判六號活字三段組とし、それから約二年の後ち、同じ菊判で九ポイント二段組に改めた事は、度々書いたが、此九ポイント二段組は非常の好評だつた。第一に、誌面の大きさと活字の大きさが釣り合つて居る。それから段割がせゝこましくなくておちついて居る。其上、活字が新

しくて、紙質が上等で、印刷が鮮明たご云ふので、非常の好評だったのである。我々は、體裁變更當時、各方面から褒められて面目を施したものだ。

處が、此體裁は、紙の利用から見ると、餘り好ましいものではなかつた。一行の字詰が多いから、行ご行ごの間を相當にあげなければならぬ。そして、天地をあげ、左右をあげ、その上更に、上段ご下段ごの間を相當にあげなければならぬ。あげ方が足りないご、體裁がよくならない。あげ過ぎてもいけないし、あげ足りなくてもいけない。活字ご字詰に相當したあげ方をしなければならぬ。斯様な事は讀者は定めし無頓着に見て居られるたらうが、これにはキチンごした法則があるものである。近頃流行の圓本は、讀み悪いご云つて評判が悪い。それは必ずしも活字の小さい爲めではない。行間ご字詰の研究が足りない爲めである。活字を小さくすれば、字詰めを少くしなければならぬ。そうすると、小さい活字が大きく見へる。新聞紙は此關係をよく研究してゐる。圓本たごて、之に意を用ゐれば、小さい活字でも讀みよくなるのである。斯様な次第だから、我々は菊判二段組を褒められながら

も、不満であつた。經濟雜誌は經濟雜誌らしい造り方をしなければならぬ。體裁に偏して製本費を顧みないのは經濟雜誌の本分を逸するものだから、機會があらは、之を改良したく思つて居た。

ご云つても、部數の少い時代は問題にならない。部數が少なければ、苦心して製本費を引き下げても、それだけの効果が擧げられない。窃に部數の増加を待つて居た處、戰時景氣が高潮して、其機會が來たのであつた。

そこで、愈々大正六年の一月一日から、我々の理想を實行する事にしたのだが、之をやるには、無論大に研究した。

我々は先づ外國雜誌を見た。いづれも形が大きい。日本の如き小型の雜誌はない。それは、單に、米國だけの事ではなく、英吉利も佛蘭西も獨逸も皆なそうである。米國は何でも大きいのが好きだから、雜誌の形も自然大きくなるご云ふ事はあるが、其他の國も、これご同一であるのは何故か。我々は之れを經濟關係から來て居るものご見た。即ち雜誌の形を大きくすると、紙の使用面積が廣くなる

そして、製本も簡単になる。それだけ造り方が経済になる。外國雑誌は、我々がビツクリする程、上等な紙を使つて居るが、其の反面には、斯うした経済も考へて居るのである。

我々は、外國雑誌を真似るのが上策だを考へた。それには、丁度いゝお手本がある。それは、英國から發行されて居るエコノミストと云ふ經濟雑誌である。此雑誌も大型ではあるが、米國のブラッド・ストリートやサタデー・イヴニングポストほど大型ではない。日本の菊判を倍にし、それへ一寸長味を附けたものである。

我々は此體裁をソツクリ真似る事にした。無論、此形の紙はない。印刷所の博文館に掛合ふと、特にそれと同じ型の紙を造つて呉れると云ふ事であつたから、そうする事にした。

## (四)

日本の雑誌は、薄つべらな紙ばかり用ゐて居る。外國雑誌に、斯う云ふ紙を用ゐて居るのではない。

いづれも厚味の勝つた、ごつしりしたものはかり用ゐて居る。我々が真似ねようとしたエコノミストも亦其通りで、流石、英國の雑誌だけに、實に、濫い、いゝ紙を用ゐて居る。我々は、其體裁をソツクリ真似る事にしても、それと同一の紙質を用ゐる事は出来なかつた。厚さだけ真似ねて、質はそれより下等なものにした。それでも、當時、日本の他の雑誌に比較すれば上等であつた。

其上、體裁も在來のものご全然變へた。第一に表紙を無くした。表紙は共紙にした。本文ご同一の紙を用ゐたのであつた。是もエコノミストを真似ねたのだが、考へて見ると、この方がいゝ。表紙ご云ふものは、中々、金の掛るものだ。内容を尊ぶ經濟雑誌に、こんな所へ金を掛ける必要はない。それも金を掛けて掛け榮にがするのならないが、我々が、それまで作つた表紙は、遺憾ながら豫なものではなかつた。こんなものなら、いつそ、廢止して、エコノミスト流にした方がいゝと云ふので、本文ご同一の共紙にしたのであつた。それから、表紙に目次ご社告を出す事にした。これもエコノミストをソツクリ真似て、廣告を出す事に、社内の評議は一決したのだけれども、一號二號は其手順に行か

なかつた。ご云ふのは、廣告を出すにしても、表紙の事だから、下らぬ廣告は出したくない。處が、廣告は、下らぬものなら直ぐ出せるが、いゝものになるご、中々、出せない。殊に、我々の望むものは銀行の廣告たつた。銀行のいゝのはかり選り、其廣告を表紙へ並べようとしたのであつた。斯う云ふ廣告はこつちの思ふ通り取れないので、一號二號は目次ご社告を掲げ、三號から實行する事にしたのであつた。——實を云へば、其三號まで、掲げた廣告が全部取れたのではなかつた。中には、一つ二つ無斷掲載のものもあつた。此分は、無論、料金を貰ひに行かなかつた。然し、出された銀行の方では、いづれ料金を貰ひに来るものご思ひ、不都合を責めて來た。私は其時正直に白狀した。

『如何にも仰しやる通り、あの廣告は無斷掲載だから、不都合ご云はれるのは御尤もです。然し、私達は、あなたの銀行を廣告する爲めに、あの廣告を出したのではありません。私の雑誌の裝飾にあの廣告を借用したのです。いけなければ、次號から撤退いたします。差支へなかつたら、其儘にして置かせて頂きたい。料金は決して頂戴に出ません。』

ご、やつた。そしたら、先方でも、無理に取れごは云はなかつた。斯くして表紙の一部に無料廣告を掲載する事、一年有餘に及んだ。そのうちに、先方ご妥協が出來て、廣告料が貰へるようになった。無論輕少である。只でも出して行く廣告だから多くは貰へない。よく私に

『君の雑誌の表紙の廣告は、場所が場所だから、随分高いたらうね。』

ご、訊く人がある。局外者ごとしては、そう考へるのが當然たらうけれども、事實は反對だ。弊誌の表紙の廣告は高くない。他の頁に比較すれば、却つて安いのだ。其代りこつちで選り好みをする。頼みに來ても、誰にも應ずるご云ふ事はしない。こつちで思ふ廣告でなければ、應じない。それだけ、料金を安くして居るのである。此邊の遣り方は、聊か變つて居る積りだ。是が我々の特色ご云へば、云へるのである。

## (五)

さて、愈々、大正六年の一月一日から、新型の雑誌を出した。我々は其時内心甚だ得意であつた。斯う云ふ新型は日本には珍らしい。そして如何にも經濟雜誌らしい。讀者は必ず歓迎して呉れるたらうと、期待したのであつた。

處が、大外れ、讀者は大不満であつた。こんな間拔けた形はしようがない。第一携帯に不便だ。それから寝ころんで讀む時、讀み憎い。こりや、改善でなくて改悪だ、と云ふ非難が八方から起つた。こつちの苦心を爪のあかほも酌んで呉れない。そうなるを、聊かいま／＼しく、

『外國の經濟雜誌は皆なこつち云ふ形だ。』

と、辯解すると、一層聲を勵げまし、

『外國は外國、日本は日本。日本人に讀ませる雑誌は、日本人に向くようなものを作らなければならぬ。』

と、云ふのであつた。

これで我々はスツカリ參つて仕舞つた。と云つても、色々の準備をしてあるのだから、直様後へ戻す譯には行かない。——讀者にも馴れると云ふ事はある。馴れたら苦狀も少くなるたらう、と考へて暫く形勢を觀望した。

處が、時が経つても非難はやまない。否、却つて増すばかりであつた。新型を攻撃した投書が毎日のように来る。はげしいのになるを、

『こんな馬鹿げた形を改めないならば、讀者をやめる。』

と、まで極言して来る。

我々は協議の上、斷然、讀者の意見に従ふ事にした。それにしても、舊型に戻すのは、餘りに智慧が無さ過ぎる。我々の意見と讀者の意見を折衷した新型を案出する事を研究した。

我々の意見は、前に屢々述べた如く、雑誌を經濟的に作ることにした。讀者の意見は、携帯閱讀に便なることだ。此意見は兩立しない。讀者の意見に従ふと、形を小さくしなければならぬが、形を小さく

すると、経済的にならない。そこで、此馳背した兩意見を如何に調和するかを研究した末、其形を少しく小さくする事にした。詰り、舊型と新型との中間を採用する事にしたのである。

舊型は菊判で、新型は菊二倍判だから、其中間を採ると四六倍判になる。我々は之を採用する事にしたのである。現在の形が即ちそれだ。

新型は、あはれや、僅か、五ヶ月の壽命しかなかった。之をやめて六月一日から折衷型を出した。これでごうやら読者の苦状は納つた。そして、我々の理想も或程度まで實現する事が出来た。

回数は、新型變更と同時に月二回にした。それから二年の後ちに三回にした。

活字は、新型變更當時、九ポイントであつたが、二年の後ち八半ポイントに改め、直ぐ又半年後ちに八ポイントに改めた。現在の活字がそれである。

其當時、新聞は此活字を用ゐてゐたが、間もなく七七半に改め、更に七半に改めた。我々も之れに倣はうかと思つたが、此上活字を小さくすると、読み憎く、なるのでやめた。

現今八ポイント活字を用ゐて居るのは本誌のみである。獨りポツチたご共通の利益を得られない不経済はあるが、止むを得ない事にして居る。

以上が體裁變更に對する我々の苦心である。こんな事は、一般讀者が聽かれても何の興味もなからうが、局に當つて居る我々は随分苦心をしたものである。

## 本社新築

### (一)

颯殼町の事務所が狭くなつた。一方、金も少々出来た。そこで、本社の新築を思ひ立つた。

然し、新築は初めからの計畫ではない。茲に到るには多少の曲折があつた。

最初、我々は、我々が借りて居た建物を買はうと考へた。



我々の借りて居た建物は三軒長屋の一つであつた。我々の隣りが小間物同業組合事務所、其隣りが小間物化粧品屋——此三つが一つ建物を三つに割つて、其一つを借りてゐたのであつた。家主は三原堂と云ふ菓子屋。同じ蠣殻町で、程近い所に在つた。内々、探りを入れて見ると、買はうと云へば賣りそうな様子。然も、値段は餘り高い事を云はぬらしい様子。そこで、愈々度胸を極めて、建物買受けの交渉に取り掛つた。三軒を一軒にし、其全部を使へば、我々の活動には充分と思つたからである。斯う云ふ時の交渉は皆川君と極つて居る。殊に相手が商人と成ると、皆川君でなければ駄目だ。我々は創刊當時、澤村幹三と云ふ名外交を得た。然し、此男は餘り外交がうま過ぎて、先方に警戒される嫌ひがあつた。皆川君と成ると、そう云ふ懸念は微塵もない。元來、質實の男であるから、浮いた調子が少しもない。それであつて、話上手で人當りが軟い。交渉談判には、お話し向きに出来て居る我黨唯一の外交官である。

皆川君が獨特の外交術で、ジワジワ談判すると、話は至極圓滿に進行して、一萬圓揃みに賣買しようと思つた。其折柄、私が所用あつて大阪に出張した。そして、我々を後援して呉れて居る某先輩に此事を話した。すると、其先輩が云ふには、建物だけ買ふなんて馬鹿げて居る、須らく土地を買つて、それへ思ふような建物を建たらうか、と云ふのであつた。

私は、其時まで、土地を買ふなんて、夢にも思はなかつた。然し、そう云はれて見れば尤もだ。人の土地へ建てた建物では、氣が落ち附かない。自分の土地へ自分が建てた建物でなければ、ゆつくりしない。そうしたら、世間の信用も厚くなるに相違ない。銀行や我々の商賣は信用が第一だ。信用は物質だけでは得られぬものだが、物質が伴へば、尙更シツクリする。誠に、いゝ事を聽かせて貰つたと思つた。そして、そう云ふ事にしたと思つた。

だが、そうするには、金が足りない。是が難關だ。其事を其先輩に話すと、是れは又心得たもので我々の難關を至極手軽に扱ひ、其解決法を教へて呉れた。曰く、買ふ土地を擔保に入れて借金をせよ

と云ふのである。

是れも、私には氣附かぬ事だつた。こんな事は、やりつけて居る人には、何でもない事だらうけれども、當時の我々は、そう云ふ名法を知らなかつた。私は、ハタミ膝を打つて早速其忠告に従ひ、其名法を實行する事にした。そして、直様、大阪から東京へ電報を打つた。建物買受け見合せの電報である。

東京へ歸つて、早速土地の搜索に取り掛つた。

最初は矢張り、蠟穀町、兜町方面を探した。無い。兜町方面に只一つあつたが、高くて手が附けられなかつた。

轉じて吳服橋から數寄屋橋の間を探した。無い。三菱原も一應は當つて見た。是れは借地だが、永久借地で、土地を買つたと同じ結果になるから……。處が、我々のような、五十坪や百坪と云ふ小さな相談は、てんで受附けて呉れなかつた。

(二)

段々探して麴町と芝の境界へ出た。そうしたら其處に澤山のサラ地があつた。外濠を埋めた跡である。今日では、此方面も大抵家が建つて仕舞つたが、其當時は空地だらけたつた。

何よりも怖いのは値段だから、先づソツトそれを當つて見た。そうしたら案外安い。いゝ所で二百五六十圓、悪い所たゞ百五六十圓に過ぎない。吳服橋—數寄屋橋間のザツト半分だ。兜町附近に比較すれば、其三分の一にも當らない。値段の安いのは何より結構だ。唯遺憾なのは、兜町に遠ざかる事であつた。然し、考へて見ると、その方が却ていゝようでもある。兜町に近いと、株式相場の變動が手に取るように分つて便利だが、其反面には我々が相場臭くなる嫌ひがある。我々は相場をやつてはならぬ。之をやるに、坊主がなまぐさ物を喰ふより悪い。

我々は絶対に之をやらぬ事にして居る。だが、兜町附近に仕事をして居ると、やらなくとも、そう

見ない。是れは場所の關係で止むを得ない。そこで兜町から遠ざかつて、立場を明かにして置く事も必要だ。此點を考へると、寧ろこつちの方がいい。所謂、一利一害なんだから、土地の安い所を探つて、こつちにしようぢやないか、と云ふ事に、我々同志の相談は一決した。

そこで地主と交渉を始めた。地主は東海生命であつた。無論安い方の口だ。高い方は虎之門の四ツ角になるのだから、其處の欲しいは山々だが、値が高いから、天からあきらめて、一應の交渉たもしなかつた。

東海生命は買ふなら賣ると云ふ。此點では双方の意見が一致したが、向ふは、一劃四百坪を一度に賣りたいと云ひ、こちらは半分しか買へないので、一時交渉が行き悩んだ。然し、それも二三度折衝して居るうちに、妥協が出来、衆議院寄りの方面を半分分けて貰ふ事になつた。値段は一坪百五十圓先方の唱値は百六十圓であつたが、我々が譲受ける半分は裏地になるので十圓まけて貰つたのであつた。土地の約束が出来れば、次ぎの仕事は金の工面である。我々に取つては是が一番難問題だが、工

面をしなければ土地が買へないのだから、是非もない。某先輩に頼んで、勸業銀行へ交渉して貰つた。此銀行は土地擔保に金を貸す事を專業にして居るのだから、別に面倒はない。我々の申込を直ぐ受付けて呉れた。但し、我々が希望しただけの金は貸して呉れなかつた。我々は三萬圓に買ふ土地だから其七掛の二萬圓を貸して呉れと申込んだ。處が、勸業銀行ではそれだけでは踏まなかつた。市からの拂下價格が七十圓、其後地價が騰貴して居るにしても、それだけの値打がないと云ふので、一萬五六千圓しか貸さぬと云ふのであつた。一萬五六千圓では、少々、我々の懐都合がよくないが、貸さぬと云ふのを無理に貸せと云ふのは、職業上、我々の恨むべき事だから、それならそれでよろしいと云つた。そうしたら、銀行では、氣の毒らしい顔付をして、一萬七千圓貸して呉れた。自ら進んで一二千圓齎して呉れた譯である。

これで、土地が手に入り、次ぎに建築となつた。是が又わからない。何處の誰に頼んたらいいの、か皆目わからない。そこで、又先輩に頼んだ。そうしたら、竹中工務店を紹介して呉れた。随分、大き

な請負師で、我々の小建築を頼むには、見當違ひのような氣もしたが、先方では快く引受けて極めて親切にして呉れた。

(三)

建物は土地一はいにはしなかつた。そんな事をする金もなかつたし、必要もなかつた。先づ土地を半分使ひ、他の半分を後日の發展に備へる事にした。

土地は二百坪だから半分使つても、百坪ある。これへ一はい二階建を建てると百五六十坪になる。それでも廣過ぎる。我々は本屋を三十坪二階建とし、それへ四十坪の附屬建物を添へる事にした。附屬建物は平屋である。平屋は工場と勝手にするのであつた。

工場は斷はるまでもなく、印刷工場である。と云つても、それは、組みから刷りまで備へた完全の印刷工場ではない。活字だけ一式整へ、印刷機械は手輕のものを一臺入れるだけである。ナゼこんな

簡式の計畫をしたか云へば、それには理由がある。

此頃我々は雑誌の印刷を博文館印刷所へ頼んで居た。博文館印刷所は値が安い。そして機械も完備して居る。此點では申分のない印刷所だが、唯遺憾なのは、校正が思ふように行かなかつた。

我々は校正では随分我儘な事をする。校正が思ふように行かないのは、畢竟、我々が我儘な事をするからであるが、我々はそれを承知しながらも、矯めることが出来ない。その爲め一日で済む校正が二日になる。二日に済まないで三日になつたりする。其暇潰しが大變だ。其頃雑誌の發行は月二回であつたが、校正の爲めに、一ヶ月少くとも四日は取られる。其間博文館印刷所へ詰め切つて、外客は一切謝絶、經濟界の出來事に對しても無關心に過ぎねばならぬ。是が甚だ苦痛であつた。

其上、工場の交渉が中々厄介であつた。是れもこつちの我儘からであるが、それを矯められないのだから、困る。そこで、自分で工場を造らうと決心した。全部ではない、一部である。唯、活字が組め、簡單の刷物がやれ、はそれでよいのだ。刷りは従前通り博文館印刷所へ頼む計畫であつたのだ。

無論、斯くする事の不經濟なるは、よく知つて居る。印刷所の妙味は刷りにある、組みは何處の印刷所でも儲らない。其組みをやり、刷りをやらないのだから、計算的には馬鹿げて居る。然し、校正の暇潰しと、工場交渉の厄介を考へると、損をしてもその方がましなので、之を決行する事にしたのである。

勝手は一同の賄ひをする爲めであつた。我々は他で使はれて居た時、辨當代の支拂に大負擔を感じた。大概の所では、勤め人は、他から何か取つて晝飯を食ふ。我々が以前勤めた所は皆なそうであつた。詰らぬ物を食つても、他から取るに、月末の勘定が嵩む。之を拂ふのが大苦痛であつた。中には苦痛の餘り勘定を拂はぬものすらある。そう云ふ所の食物屋は電話を掛けても、中々持つて來ない。私が勤めた某新聞社は現金でなければ持つて來なかつた。現金とすると、持合せがある人さない人さがある。ない人は食はないで居る外ない。其社には晝飯を食はぬ人がたいぶあつた。天下の新聞記者たるものが、錢がなくて晝飯を食はぬなんて、随分悲惨な話だが、それが事實であつたのだから、是

非もない。先輩の話に依ると、現金引換でも持つて來るのは、未だよい方で、新聞社に依つては、それでも、持つて來ない所があるそうた。さうしてかこ云へは、器物を巻き上げられる爲めたご云ふ。茲に至ればお話しにならない。

兎に角、私は辨當代で苦い經驗を持つて居た處から、勝手元に對して特別に考慮を拂つたのである

(四)

新築は大正七年の十一月に出來上つた。日は何日たつたか忘れた。出來上ると、蠣殻町から越して來た。蠣殻町の棟割長屋と新築とを比較すれば、比較にならぬ程の廣さである。あつちは、一階二階三階を合せて三十坪もない。こつちは附屬建物を合はせて百坪からある。三倍以上である。我々は新築の建物へ越したならば、大に廣さを感じるであらうと、想像した。處が、越して見ると、一向其感じがない。この室も人が一はいである。是れは遣り方だ。遣り方に依つて、斯うも違ふものかと、私

は其時一つの學問をした。

それから二年経つと、此建物も又狭くなつた。そこで増築をした。其結果、延坪は百四十坪ばかりになつた。其後間もなく震災があり、震災後新に一棟の工場を建てた。印刷も製本も一切自社でやる爲めである。我々は新築と同時に活字を一式揃へたから、それで非常に便利になつた。だが、印刷の方には未だ不便があつた。

我々の雑誌は、月三回發行で、十日の間隔しかないから、發行日が一日遅れても困る。處が、他所に印刷を依頼して居ると、發行日がのべつ幕なしに遅れる。我々が一生懸命になつて締切つて、紙型に仕上げて印刷所へ持たせてやる。是が一時間遅れると、翌日の仕事に組入れられないで、一日遅れるような事になる。さうも我々の仕事は機械のようにキツチリ行かない。五時に書き上げる積りであつたものが六時になつたり、七時になつたりする。それを、印刷の方で加減して呉れるさよいのだが他所へ印刷を依頼して居ると、さうはして呉れない。時間づくめで、キチンとやられるから困る。其

上、日曜が休の爲めに印刷が日曜へかゝると、一日遅れる。これで大に困つた。そこで、印刷も自社でやるようにしたいものたさ兼ねなく思つて居た。

處が、之をやるに就て、一つの難關がある。それは警視廳が容易に動力の許可をして呉れない事である。我々は最初小印刷機を据ゐるに就て動力を一馬力据付ける許可を得た。此許可が随分面倒臭さかつた。其後機械を一臺増設するに就て又一馬力の許可を得た。是れは以前より一層面倒かつた。

處が、印刷を自社でやるさなるさ、又動力の許可を得なければならぬ。然も、それは、一馬力や二馬力の事ではない。十五馬力から二十馬力位要る。到底それだけの許可を得られる見込がない。そこで、自社印刷を熱望しながらも、其儘で幾年間を過した。

さうして居るうちに清浦内閣になつた。我々は清浦内閣と何の關係もないが、私の友人の某君が清浦さんに近い。そして政府の色々の役人を知つて居る。一日友人に印刷と動力の話をした。すると、友人は、そんな事は何でもなし、己が許可して貰つてやるさ云ふのであつた。私は其友人によろしく

頼んだ。そうしたら、彼は私を警視廳へ二三度連れて行つた。そして、色々の願書を出させた。無論それは代書から書いて貰つた。そうしたら、一ヶ月ばかりで許可になつた。以前を思へば、丸で夢のような事であつた。

然し、許可になつてからよく調べて見ると、それは必ずしも出来ない事をして貰つたのではなかつた。麴町内幸町は商業區域と云ふものになつて居る。此區域には動力は三馬力しか許可せぬのが原則だ。處が、これには例外がある。新聞紙其他の公益事業ならばと云ふ例外である。此例外規定に依つて許可して呉れたのである。

## (五)

動力の許可を得、多年の宿望を達したので、ホツとした。そこで早速工場の建築に取り掛つた。

工場は鉄筋コンクリートにした。と云ふよりも、せねはならなかつたのだ。建物を建て、雑誌が刷れるだけの機械を据ゑるさなるさ、ナカ／＼金が掛る。我々の瘦世帯ではやり切れない。そこで金の都合から云へば、あんちよくな木造にしたかつたのだが、そうする事は、警視廳の建築令が許さない。此地域は耐火建築となつて居るので、止むを得ず、金のくめんをつけて鉄筋コンクリートにしたのであつた。

土地は直方形の所が七十坪ばかりあいて居た。これへ五十坪の二階建をした。本來は三階建の設計になつて居るのだが、それだけの金融に骨が折れたから、一階を後日に廻はし、二階建にしたのであつた。尤も、これには粗末な地下室が添ひてある。これをも計算すれば三階建とも云へるのである。建物が出来上ると、これへ五臺の印刷機を据ゑた。

これで雑誌が刷れるようになった。のみならず、製本も自社で出来るようになった。自給自足の計畫が一切完了したのである。

然し、斯うなつて見ると、又新たな不満が起る。それは製本であつた。製本は、一枚々々紙を折つて

やるのだから、これに意外の時間が掛る。と云つても、それは今に始まつた事ではないが、他の手筈が整つて来た爲め、其馬鹿らしさが目立つて来たのである。

そこで、更に、それを機械化したい望みを起した。そうするには、輪轉機を購入しなければならぬ。すると、刷りと折りが一度に出来て、非常に出来上りが早くなる。詰り、これまで刷りと製本で四日掛つたものが、二日に短縮されるような事になるのである。我々旬刊雑誌に印刷期間が二日短縮される事は、大事件である。一日も早く、之を實行したく思つたが、之を實行するには又例の金が要る。暫く隠忍して時機の到来を待つた。

さかくするうちに、其時機も来た。そこで、輪轉機を注文し、出来上るのを待つて工場へ据付けた。一昨年の夏からの雑誌は、其輪轉機で印刷して居るのである。

これで弊社も小さいながら一つの完成品となつた。當今雑誌社は多いが、印刷から製本まで自社で出来るのは弊社だけであらう。

こんな事は、錢勘定をして出来るものではない。勘定づくならば、組版も、印刷も、製本も、一切他の印刷所へまかした方が徳である。然し、それでは前述のような不便がある。そこで、損益を超越して、こんな設備をしたのであるが、惜しい事は少しもない。我々は、元々、一介の貧書生であつたのだ。それが讀者のお蔭で斯うなつたのだから、讀者奉仕をするのは、當然である。

貸席龍宮、三階借間當時の創刊時代を願はば、丸で夢のようなものだ。借間が借家になり、赤坂が蠟殺町となつて、今では九重城下の麴町區に、小なりと雖も地面持ちの自家建築である。斯様な發展は創刊當時夢にも想像しなかつた處である。

社員も最初の三人が五人となり、十人となり、今日では職工を合はせると、七十人以上居り、社友を加へると八十人を超ゆる。特に編輯員はかりでも三十幾人が居る。日本では、一つの雑誌で、是れだけ多くの編輯員が居る所は、他にない筈である。弊社は此點に於て、日本一を誇り得るものである。發行部数が、經濟雜誌として、日本一なる事は云ふまでもないが……。



副業

(一)

大正十五年三月にダイヤモンド通信を發行した事は、前に書いた。是が副業の始まりである。此通信は、最初一週二回、後ち更に日刊に改めた。それは大正七年十一月であつた。

日刊に改めるに就て議論があつた。ダイヤモンド通信の如き特報は、謄寫版である所に妙味がある之を活版にすると、平凡になる。と云ふのが反對論の根據であつた。然し、私は此反對論には餘り耳を傾けなかつた。活字は謄寫版より読み易い。其上、日々報道するのだから、讀者に便利である。それが悪い譯がない。私は斯う考へたから、本社移轉と同時に斷然之を日刊に改めた。そうしたら、其結果は矢張りよかつた。

然し、何分にも、斯う云ふ株式投資の材料になるものは、盛衰がはげしい。時に依つて、甚しく多くなつたり、少くなつたりする。大正九年三月、經濟界に大反動が起ると、ダイヤモンド日報は激減した。一時最高一千近くに達したものが、段々減つて三四百になつた。その爲め、弊社の損益勘定が甚だ悪くなつた。

然し、單にこれだけの事なら未たい。肝腎の雑誌も減つた。雑誌は最高二萬七千部に達した。是がメキ／＼減つて二萬部を割つた。其打撃は一ト通りでなかつた。

私は勿論、斯うなる事を覺悟をして居た。そして、極力斯うなつても、倒れないような用意をして來た。手取り早く云へば、出来るだけ金を溜めるようにして來たのだ。

我々は、一種ヘンテコな名譽心を持つて居る。我々は常に賢人振つた態度で人を評論して居る。そう云ふ者は、己が評論される人さならないように氣を付けなければならぬ。我々は此名譽心の爲めに一層反動後の用意を嚴重にした。だが、そうした處で、高が知れて居る。振出しが一文なしたから、

溜めてもたいした額にはならない。其上、土地を買つたり、建物を建てたりして居るから、正味反動後の用意になる金は幾らもなかつた。然も、其時、社員の數は大分殖へて居た。今日と較べれば少いが、それ以前に比較すれば非常な殖へ方であつた。

私は、最初、收支を償はず事に、満身の精力を傾注した。次ぎに、戦時景氣が出て、收支が償ふよゝになるよ、自分が死んでも社の潰れない用意にのみ心を砕いた。私は、小さい時から病身の爲めか常に自分が死んだらと云ふ事を考へる。無論、死にたくないから、怠らず養生はして居るが、そうしても長生するように思へない。十五六の時は、二十まで生きられまいと考へた。二十歳まで生きて見ると、少し自信がついて来て、三十歳位まで生きられるよふな氣がした。三十まで生きて見ると、四十歳迄と思ひ、五十近い今日となつては、又六十近くまで……と、思ふよゝになつたが、斯うなるまゝでは、幾階段も經て居る、いつの時代でも長命を豫想した事はない。だから、ダイヤモンド社を經營して居ても、常に自分が死んだら……と云ふ事のみを考へる。

自分が死んでも、相澤君も居るし、皆川君も居る。兩君共、ダイヤモンド社を背負つて立つに充分の人ではあるが、心配性の私には、自分の死後が氣支はれる。自分が死んでも大丈夫にしたい。——それには人材を網羅するの外ないかと考へたから、彌穀町へ移轉して、儲かるよゝになつてからは、ドシドシ記者を殖やした。

これは、例の金溜め主義とは、逆行する方法であるが、私は金より人が大切なと考へた。

(二)

大正九年に反動が來た時には、社員は可なり殖へて居た。編輯、事務、工場の三部に大阪支局員を加へれば、彼れ是れ五十人に達して居た。赤坂時代に比較すれば十倍に膨脹したのである。

自然、經費も大膨脹をして居た。是れは、無論、そう云ふ方針で進んだ爲であるが、之を貯蓄——反動來の用意、と云ふ方面から見ると、經費の膨脹が餘りに大き過ぎた。私は其時一種の歎息をした

貯蓄なんて云ふものは、高の知れたものである。——私は反動來の場合を慮つてコツ／＼金を溜めて來た。處が、イザ其場合になつて見ると、其金では一年か二年しか支へられない。實に小さな力であるのに失望した。

そこで我々は、到底呑氣に暮らせなつた。何ぞかせねはならぬと、善後策に心を碎いて居る折柄、池田藤四郎氏が亞米利加から歸つて來た。

池田氏は、物をよく知つて居る人だ。殊に外國の事が詳しい。何でも彼でも實によく知つて居る。外國へ行かない時で、行つて來た人以上に知つて居た。それは、總べて、讀書の賜であるが、池田氏の讀書に來ては、たいしたものだ。毎月外國の雑誌を十數種、著書を五六冊讀む。それを二十年も三十年も繼續して居る。如何に貧乏しても、讀書だけはやめない。此點から見ると、氏の讀書は稍々道樂の域に入つて居た。それ位だから、知識は實に豊富だ。我々は何か分らぬ事がある、池田氏所へ訊きに行く。すると、忽ち解決が付く。其物識りの池田氏が米國に二年ばかり滞在して、大正九年

の暮に日本へ歸つて來たのである。我々は氏から色々新しい事を教へて貰つたが、そのうちに一つ、私の副業欲を刺戟したものがあつた。それは米國で發行して居る株式通信である。

我々は、パブソンレポートにはお馴染になつて居た。これも矢張り池田氏から教へて貰つたのだがそれへ更に池田氏がブルックマイヤーの經濟通信を持つて來た。此經濟通信は商と工と株式の三通りに別れて居たが、其中の株式通信が興味深く見られた。

私も之を真似ねようと思へた。無論、日本には日本向のものを作らねはならぬが……。

元來、我々是一種の株式通信をやつて居たのだ。ダイヤモンド通信——ダイヤモンド日報がそれである。然し、これは只材料を供給するに過ぎない。讀者はそれへ、更に株式的の解釋を加へねはならぬ。其解釋を加へる事もこつちでやる株式通信を出してはどうか。私は斯う考へたのである。

幸ひ、同人には無髯老人と云ふ株式觀測の大家が居る。老人から一般市況の觀測をやつて貰ひ、私が一株々々の選擇をやれば、それで首尾一貫する。

此計畫を立て、私は無髯老人に相談した。老人は即座に賛成して呉れた。他の同人にも謀つたがこれも皆な賛成して呉れた。

そこで、愈々副業を一つ増して株式通信を出す事にした。

さ云つても、我々は、浮薄なる投機材料を供給したくない。我々は飽くまで質實なる投資の資料を供給する事を心掛けた。

そこで通信の名を放資案内と云ふのにした。

之を大正十年の二月に出した。

果して歓迎された。雑誌日報で、相當信用されて居る所へ、此特報を出したものだから、歓迎を受けたのである。印刷は赤黄青の色紙を取り交せて用ゐた。是等も變つて居るので氣受けがよかつた。

## (三)

放資案内の好成績に氣をよくして、次に經濟要報と云ふのを發行した。これも受けがよかつたが、永續しなかつた。さうしてかさ云へば、それは重役を當て込んだ爲めである。重役は忙しい。落ちついて物を読む暇がない。お困りの事たらうと察せられる。そこで、忙しい重役でも讀める、簡にして要を得た、經濟通信を發行したならば、重役諸公はさぞ歓迎されるたらうと考へて、經濟要報を發行したのであつた。専ら重役を目的にした處から、一名之を重役通信と稱へた。發行は一週二回とし、一回に四項目宛書いた。書いた文章は元より簡潔の事、それへ精密の數字を添へた。文章で要領を得て貰ひ、委細御必要の場合は、表を御覽なさい、と云ふ趣向にしたのである。

其趣向が大に當つて、重役からは、褒められた。自然申込も相當にあつた。

處が、此通信は段々減る。減つて、さうして新規の申込がない。即ち次第弱りの光景となつたのである。おかしいから調べて見た。さうしたら、重役先生、初め讀んだが、段々讀まなくなつた事がわかつた。それは敢て我々の通信が詰らぬからではない。忙しい重役は、如何に簡潔の通信を以てして

も、結局讀まないものである。

それでは最う此通信を出した意義がなくなつて居るから、やめようか決心した。其折柄に、丁度經濟指數の研究が出来上つた。

經濟指數云ふのは、經濟界の状態を簡単な數字にしたものであるが、我社は此研究を小林新氏からやつて貰つて居た。

小林新氏云ふのは、早稲田大學の教授にして我社の顧問。其來歴を云へば、早稲田の商科を出て半年ばかり我社の記者をやり、それから外國へ留學して、歸朝後早稲田大學の教授となり、我社の顧問となつた人である。

外國へ留學したのは大正七年、歸つて來たのが大正十年、其間丸三年。色々新しい經濟學を研究して來られたうちに、特に我々の注意を引いた事が二つあつた。それは物價指數と經濟指數の造り方である。

我々は昔の學生に返り、若い小林教授を圍んで先づ其講義を聞いたものた。それで大に感服して、我社で之をやる事にした。物價指數の方は間もなく出來たが、經濟指數の方は中々そうは行かない。小林氏に専屬の助手二名を附けてやつたのだが、それで丸三年掛つた。是が出来上り、さう云ふ風にして、發表しようかと思つて居る折柄、經濟要報が次第弱りの光景を呈して來たものだから、何も彼も一つにして、新規の特報を造る事にした。即ち、從來の放資案内に經濟要報を合併させ、それへ更に經濟指數圖を基礎にした經濟觀測を加へたものを造ることにしたのである。

之をダイヤモンド・レポートと名づけた。大正十三年十二月に發行して今日に至つて居る。こんな風にして、我々は副業をやつて來た爲めに、懷都合が大によかつた。財界變動の打撃を強く受けずに済んだのである。

私は自分の造り方を小細工に失せるように時々感ずる。殊に記事の二重賣りは餘り寢覺めがくない。然し、私には何よりも大切なものがある。それは言論の獨立である。言論を獨立させるには會計

が獨立して居なければならぬ。私は其必要から色々の副業をやつて來たのである。雑誌だけの讀者は副業を餘り面白くなく感じて居られるたらうが、是れは言論獨立の爲めであるから、御寛容を願ひたい。

## 震 災

### (一)

震災も六年の昔になつた。月日の經つ事の早さが痛感される。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、グラ／＼と來た時、私は病院に居た。入院して居たのではない。入院しようとして事務所と交渉をして居たのである。

私は其少し前に糖尿病に罹つて居る事がわかつた。初期ではあるが、不治の難症であるから、用心專一と心得、駿河臺の杏雲堂病院へ入院する事にした。病室がない。四五日待つて居ると、病院から知らせがあつた。それに依つて參上し、事務所と入院の交渉をして居る時、大震動が起つたのであつた。

私は、極めて隱病の性質ではあるが、地震だけには度胸がいゝ。グラ／＼と來たさて表へ飛び出すような事はしない。周圍を見廻はしながら、受付の前に立つて居た。曾つて経験した事がないほど震動がはげしい。病院の連中は悉く表へ駆け出した。そこで私も考へた。

『表へ駆け出した者が助かるか、内へ居残つた者が無事に済むか、人間の運命なんて云ふものは測り知れぬものではあるが、誰も表へ駆け出す場合に、自分獨り頑張つて居残り、それで壓死でもすれば物笑ひの種となる。』

と、突差の間に、斯う考へたのであつた。

そこで、私も表へ出た。駆け出しはしなかつた。悠々歩いて表へ出た。すると、其トタンに、前

の煉瓦の塀の一角がガラ／＼と崩れた。私の運命觀は斯う云ふ所から生れ出て居るのである。若し、私が慌はて、病院から駆け出したならば、其餘勢で私の體は向ふ側の煉瓦塀にぶつかり、大怪我をしたかも知れない。詰り、此場合、駆け出さなかつたのが私の幸ひであつたのである。

表へ駆け出して居た連中は、煉瓦塀の崩れに驚き、私の自動車にすがりついた。其自動車は病院の入口の石門の脇に待たしてあつたもので、揺れて居る石門が折れでもすれば、煉瓦塀以上の大事が出来るのだが、其場合、そんなことを見定める人は一人もなかつた。數人の人が無意識に私の自動車にすがり付いたのである。

震動は間もなくやんだ。私は事務所へ戻つた。事務所の人は未だ戻つて居ない。病院内は上を下へ返しての混雜で、入院の交渉など到底覺束なかつた。

其光景を見て、私は急に社の方が、心配になり出して來た。入院は又改めて交渉する事にして、私は病院を辭した。病院は其後數時間にして焼けた。辭した其時が私の病院との別れであつた。

私はあの病院がなつかしい。私はあの病院へは五年間通つた。肺炎を病んで其治療を受けたのである。私が出京當時、私の親友が肺炎に罹つてあの病院へ一ヶ月入院した。私は其時附き切りで友人の看護をした。其關係で、私はあの病院が東京有數の名病院である事を知つた。其後、私は、郷里の人などで名醫を求むる人があれば、必ずあの病院を紹介した。

そして居るうちに、私が病氣になつた。然も、其病氣はあの病院が得意とする呼吸器であつたので私は五年間通ひ續けたのであるが、お蔭で私も丈夫になつた。爾來私はあの病院を大に徳として居るそれが震災で焼けたのだ。そして未だに復興しない。私に取つては甚だ残念の事である。

病院よりの歸り道、神田を通ると、潰れた家があつた。宮城前へ出ると、大路が破れて居た。日比谷公園へさし掛ると、松本楼がハヤ火を發して居た。震動が思ひの外ひどかつたのに驚いた。

社は無事だった。人も無事、建物も無事。強いて云へば、活字がひつくり返つた位な所であつた。活字がひつくり返ると、元へ戻すに一週間位かかるが、あの場合の損害としては、輕少だった。

だが、周囲の形勢は、刻々に悪くなる。餘震の襲來が頻々たるうちに、あちらからも、こちらからも、出火の聲がする。屋上へ上つて見ると、たつた今、日比谷公園の一ヶ所だった火事が、四ヶ所にも五ヶ所にも殖へ、濛々たる煙をあげながら、火焰をひらめかして居る。一大事が起りそうな形勢である。

そこで又私は考へた。斯う火事がはげしくては、社員の焼け出されが頻々出るに相違ない。そうするに、小頭を勤めて居る私は、それに對して臨機の處置をしてやらなければならぬ。私は今夜宅へは歸れない。社に頑張つてゐなければならぬ。それには、今のうちに、宅の様子を一目見て來たい。子供等は怪我をしなかつたか。建物の損害程度はどの位だったか。周囲の關係はさうなつて居るか。――私は此事を相澤君に話して、又例の豆自動車に乗つた。そして、大井の宅へ急がせた。

宅へ着いて見ると、うれしや妻子は無事だった。屋上の瓦がなたれ落ちて、危険は相當にあつたらしいが、誰一人カスリ傷一つ受けて居なかつた。但し建物は可なり傾いて壁などはたいぶ落ちて居た無論、場合が場合だから、これ式の事は問題ぢやない。其上周囲の關係も無事で、火事などの起りさうな心配は毫もなかつた。私は其光景を見て大に安心したが、唯何分にも、愚妻や子供が餘震を非常に怖れて居る。私が歸ると、それに力を得て、彼等は私と一緒に屋内に這入つたが、餘震に一トゆすりやられると直ぐ又庭へ飛び出した。そして、再び屋内へ這入らうとはしない。廣くもない庭の片隅に藁を敷き、母子五人に女中が加はり、一團となつて居る有様は、如何にもあはれであつた。私はそれにひどく心を引かれた。

さいつても、愚圖々々して居る場合でないから、私は愚妻から大震動の際の家族の行動を一ト通り聞いた後ち、大に心を勵まし、愚妻に對して一つの宣告をした。それは、斯う云ふ場合に於ける私の態度である。其時私が云つた言葉は、今思ひ出すと芝居地味で居て、甚たくすぐつたいような氣持が



するが、其時の私は眞剣だった。

私は先づ愚妻に對して、小頭たる私の義務を語つた。そして、其當然の結果として再び出社せねばならぬ事の餘儀なきを告げた。私は其時の覺悟には未だに愚妻に對して敬意を表してゐる。愚妻は田舎育ちのわからず屋ではあるが、其時だけは私の立場をよく諒解して呉れた。そして、私に心残りなく出社させて呉れた。

そこで、私は又例の豆自動車で、元來た道へ引返した。

品川灣に沿ふた昔の東海道へ出るに、灣の彼方から、一波高く、津浪らしいのが、一ト寄せ寄せて來た。幸ひに、其勢ひが弱かつたので、何事も起らずに濟んだが、横濱沖には、曾つて見た事のない恐ろしい黒雲が幾重にも渦巻いて居て、凄慘の氣を漲らして居た。何處を見ても不穩の事はかりであつた。

私は四時頃社に歸着した。社員は各々の宅を心配してポツ／＼歸り出した。其時、火事は以前の幾

倍にもなつて居て、順路で歸れぬ人が多かつた。相澤君を送つて行つた自動車などは歸路を斷れ、途に窮して、日が暮れてから漸く歸社したといふ有様であつた。

(三)

火事は大きくなるばかりであつた。日が暮れた時は、帝都の半分が火になつて居た。だが、我社の附近だけは何事もなかつた。貴衆兩院を中心にして、其附近一帶の地は出火もなければ、飛火もなかつた。

然し、私は萬一を慮つてイザミ云ふ場合の用意をした。ミ云つても、其用意は至極簡單なものだつた。決算報告の綴りや参考書冊を穴藏へぶち込み、小切手や印鑑や銀行の通帳等を自動車へ積み込んだだけである。

あゝ云ふ時の用意は、ふたんの火事の場合とは違ふ。無闇に荷物を運び出しても駄目だ。出した所

で焼けて仕舞ふ。何にしろ、イザ焼けるさなるさ、消防なしに、火は暴れ、あたり一面火の海に化するのだから、荷物の出し場を選ばなければならぬ。大きな広場か、地下室かへ藏ひ込みでもしなければ安全でない。

大きな広場さなるさ、我社としては、二重橋近くまで行かねはならぬ。是れは距離が遠くて問題にならない。又、地下室さなるさ、當時木造建ばかりたつた我社には、左様な設備がなかつた。唯、一つ、斯かる時の用意にもさ、豫ねて造つて置いた穴藏があつた。それは大きくない。九尺立方位なものを煉瓦で積み上げた一穴である。これへ荷物をぶち込み得るだけだから、何も彼もさ云ふ譯には行かなかつた。

私は極めて大切なものだけを穴藏へ藏ひ込む事にした。さなるさ、第一が決算報告書の綴り、第二が参考書冊である。我々は是れがなければ雑誌が書けない。焼けるさ、再び集めるに時が掛るし、中には時を掛けても集められないものがある。我社としては、實に大切な書類である。そこで、火事さ

なれば真先に之を持ち出す事にして居る。私は、其夜、我社に立籠つて我々の城廓を守つた十數人の同人と協力して、決算報告の綴りや参考書冊を非常袋に詰め込み、之を穴藏へぶち込んだ。是で穴藏は荒方一はいになつた。そして、一方、會計の貴重品を自動車に積んだのであつた。是れは愈々さいふ場合に二重橋前へ持ち出す用意である。

斯う云ふ風に、イザさ云ふ場合の用意はしたが、如何なる運命の神に恵まれたものか、火は中々我社の方へ來なかつた。私は限りなく我社の幸運を悦んだ。

處が、其悦びは一二時間の事であつた。魔に包まれた帝都の夜が更けて、十二時頃になると、我社の安全も當にならなくなつて來た。さ云ふのは、我社より一角高い所に在る虎の門女學館が火を吹き出したからである。

氣が附いて見れば、虎の門女學館は前から怪しい状態に在つた。窓から火の子でも飛び込んだものか、背から煙を出して居たのである。だが、其勢ひが極めて弱かつたので、我々はたいして氣に掛け

なかつたのだが、時が経つに従つて其煙が段々濃くなり、遂に十二時頃に至つて火を吹くようになったのである。

風は崖下の方へ吹きつけた。火の子は猛烈な勢ひで琴平方面へ飛んで、忽ち其處が燃へ出した。

我社の方面は、風向には少し外れて居たが、矢張り火の子は飛んで来る。私は到底駄目だと観念した。常ならば安全だが、消防機關がないのだから、助からない。琴平町の火が響てこつちへ燃へ擴つて来るに極つて居る。我社も並暫くの運命と観念せざるを得なかつた。

## (四)

愈々焼けるを観念しても、何もする事がない。用意すべき事は既に用意してある。私は會計の重要品を載せた自動車に先づ豫定の退却をさせた。それから念の爲め二三度社内を巡回した。別段取り残した品物も見當らない。此上は我々も心靜に退却してよいのだが、さうも未練がある。私が十年苦心

をして造つた城廓だ。人力の及ばぬ場合だから、焼けるのは是非ないにしても、せめて其焼ける所を見届けて立退きたい。それが其場合に於ける私の心遣りであつた。私は斯うした心持ちから、此身に危険の加はるまで動かぬ事に決心した。

善かれ、悪しかれ、決心をして仕舞ふさ、心に若干の餘裕が出来るもので、私は其時フト飛火を防ぐ事に氣が附いた。

西洋館の飛火は、大概窓から突出して居る日覆から起る。私は、先づ我社の日覆ひを悉く取除けさせた。續いて隣館の日覆にも及んだ。此隣館と云ふのは、乗合自動車の建物である。木造三階建て、我社より四五倍の大きさである。それがこつちへ覆ひかぶさるようになって居るのだから、之に火が附けば、我社は一ト堪りもない。

我々は大きな聲でドナつて、留守居の人に急を告げ、それと協力して日覆ひを悉く撤退したのであつた。こんな事をした處で、何の役にも立つまい。琴平町方面の火が燃へ擴つて來れば、さうする事

も出来ないのだが、我々は座して焼けるのを待つ事が出来ない。人力の限りを盡し、然る後ち運命に服する事にしたのであった。

處が、丁度此時であつた。宮城方面から一臺の蒸氣ポンプが駛走して來た。そして、それが虎之門にピッタリと止つた。うれしや我々の一廓を救助に來て呉れたのである。これはアトで聞いた話だが此蒸氣ポンプを差向けて呉れたのは、憲政會の小山松壽君であつた。同君が議院を危いと思ひ、其處が焼けては災が日比谷公園の避難民に及ぶと云ふので、無理に都合させて、蒸氣ポンプを差向けて呉れたのだと云ふ。小山君は我々に取りては救ひの神であつた。

震災で水道管が破裂したので、當夜、蒸氣ポンプは餘り役に立たなかつた。處が、我々の一廓には小さな川があつた。是が我社の脇を流れて居る。水の少いチヨロ／＼川ではあるが、それでも之を堰止めれば、蒸氣ポンプの一臺や二臺はやれる。我々は蒸氣ポンプの姿を見るや、消防手の指圖も待たず、直に此川の堰止めに掛つた。

それには我社に持つて來いの人物が居た。それは京谷大助君である。京谷君は柔道が初段で、力は三人力ある。其代り飯も三人分喰ふ。酒なら五人分位飲む。大飯食ひの大男だから、力が張り切れる程ある。此男が大力を奮つて堰止め工事に取り掛つた。我々が布團を投げ込んだり、古雑誌を抛り込んだりする。すると、京谷君が其上へ大石を投げ込むのであつた。其石は川フチへ飛び／＼に置いてあつたのだが、京谷君が『ヤツ』と氣合を掛けると、其石が手玉に取られて、直に川の中へ投げ込まれる。一同其強力に感歎した。京谷君の氣合が五六ベン掛ると堰止め工事は出來上つて仕舞つた。此間五分も掛らなかつた。

小川の水を利用して蒸氣ポンプが思ふ存分働いて呉れた。それが爲め、我々の一廓は完全に焼失を免れた。何たる幸運であらう。翌日一同が落合つて互に無事を悦んだ。

私の思出話は外にもあるが、重要な事は是で盡きたから擱筆する。